
続・タロと今夜も眠らない番組

シュリンケル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続・タロと今夜も眠らない番組

【Nコード】

N8355S

【作者名】

シュリンケル

【あらすじ】

地方局DJ”タロ”と仲間たちが、暖かく優しい視点から物語りを紡ぎます。

出会う人はみんなタロちゃんを好きになる
古き良き名曲（AOR）、作者手書きの挿絵を織り交ぜて物語は流れます。

今回の続編では空想の世界も多めに入ってきます。

ご意見などよろしく願います！

（DJタロはフィクションです）

前回の連載（タロと今夜も眠らない番組）でわたしは、今でも色褪せない音楽を小説の中で楽しんでみたいと思って書いていました。お話が進むにつれ、そういう事が難しく感じていました。

けれども、もう少し書いてみたくなったのは、味わいたい音楽がたくさんあるから。

どうか読んでみてください。そして、できれば音楽も（YouTubeなどで）聞きながら味わってみてください。（そうして初めてタロのお話が聞こえると思うのです）

前作（タロと今夜も眠らない番組）もよろしく！

<http://ncode.syosetu.com/n22140/>

1 プロローグ (2005年4月)

草原を渡る風。

さわさわと草をなでる風が、わたしの病室にまで届いて来る。

風に乗って千切れた草が空を切る。

タロちゃん。わたし起きてるよ。頬に風を感じてるわ。

わたしは心の中でタロちゃんに報告する。

枕元のテーブルに置かれたリンドウの花が風に揺れる。

タロちゃんの声がラジオから流れるのを聞きながら、わたしは再び夢の世界へ引き戻されて行く。

- ザ・クリスマス・ソング - (Nat King Cole)

タロちゃん、また掛けてるのね。(季節に関わらず、彼はこの曲をプレゼントしてくれる)

そうしてわたしの意識は途絶えてしまう。

わたしは幻の雪に包まれるのだ。

-
-
-

僕の愛しいマコさん。

あなたは今、どんな夢を見ている？

ラジオ局からの帰り道、僕は車のハンドルを切りながらぼんやりと想う。

白い壁、清潔なシーツ。

ビニールのスリッパ。

草原に囲まれた海辺に程近いサナトリウム。

彼女はそこで眠り続けているのだ。

信号がピカリと光る。

青信号をしばらく眺め、後ろの車からクラクションを鳴らされてやっと僕は意識を戻した。

- God Give Me Strength - Elvis Costello & Barcharach & Tom Ehlén

エルビス・コストロの不器用な歌声が、フリーゲルホルンの音色と共に暖かく車内に響く。

僕は緩やかにアクセルを踏む。

家路へとハンドルを切る。

車は走る。誰もいない我が家に向って。

> i 2 2 6 6 0 — 1 7 6 7 <

1 プローグ (2005年4月) (後書き)

続編、楽しんで書きたいと思います。

ご感想、ご指摘、よろしく願います！

2・眠り病（2005年1月）

” 眠り病 ”

担当医のサワダからマコさんの病名を聞いたのは、半年前の冬だった。

ちかちかと古くなった蛍光灯の灯りに照らされた診察室で、サワダはカルテとレントゲン写真を交互に見比べる。

彼はシックなメタルフレームの分厚いメガネを掛けていた。

（フレームには マークが仲良く並んで刻まれている）

「最初に説明しなければならぬのは」 メガネのレンズをハンカチで丁寧に拭きながら、彼は僕に向き直る。

「どこに問い合わせても答えが分からない病気だと言う事実です」

年季の入ったスチールデスクに掛けられたビニールシート越しに、一枚の女性の写真が見えていた。

「ああ、これは妻です」 僕の視線を辿ってサワダは首元を爪で掻いた。

「6年前に他界しちゃいましたね」 それでも毎日眺めてしまうのだと、サワダは笑う。

微笑みながらそっと写真をなでる。

たったそれだけの事で、僕は彼に好感を持った。

内科医のサワダは言う。

マコさんの病名は世界中の症例にも当てはまらない病なのだと。

しいて言うならば - ” 眠り病 ” -

そういう事になるらしい。

蛍光灯がチカチカと瞬いた。

病院の外で雨混じりの雪が窓辺を叩く。

そのようにしてマコさんの病名が決まったのだ。

> i 2 2 6 6 2 — 1 7 6 7 < <

2・眠り病（2005年1月）（後書き）

ご感想、ご指摘、よろしくお願いします。

（名称などの細部は作者の創作です）

3・タロの終わらない番組（いつもの風景）

- ぷっぷっぷーん。
- みんな元気！僕は今日も元気だよ
- 昼下がりのひと時を、DJタロがお邪魔します！
- ”タロの終わらない番組”が始まるよ！

僕はいつものDJブースで番組を再開する。

セットしておいたCDの”play”ボタンを押す。しゅるしゅるとCDが動き始める。

HEARTS - マーティ・バリッ -

古くとも色褪せないAOR。僕のブースからリスナーのもとに流れて行く。

曲が流れるとき、僕はマコさんを想う。
眠り続ける彼女の病室に届くようにと。

- - -

- 夏ですね。

リスナーさんは言う。

-わたしの職場では冷房が壊れてしまって、毎日が暑さとの戦いになりそうです。

-休憩時間を買ってきたアイスもすぐに溶けてしまいます。

-だから涼しくなるような曲を聴きたいな。

そして僕は曲を選ぶ。

CLAIR - ギルバート・オサリバン -

その曲は、口笛に乗ってリスナーさんのところへと届く。

暑さに負けるな、と僕は想う。

夏の初めに降り始めた雨と共に、その曲は涼やかに響いたのだ。

> i 2 2 6 6 4 — 1 7 6 7 < <

3・タロの終わらない番組（いつもの風景）（後書き）

ご感想、ご指摘、よろしくお願いします。

（名称などの細部は作者の創作です）

4・見舞い客（2005年6月）

山から伸びた一本のでこぼこ道。

その道は草原を横切り、やがてマコさんの眠るサナトリウムへと辿りつく。

僕はいつものように車を留める。

窓を全開にして草原を渡る爽やかな風をゆっくりと吸い込む。

目を閉じて深呼吸を繰り返し、僕は自分を励ます。

- 大丈夫。マコさんはもうすぐ目を覚ます -

- - -

サナトリウムの玄関をくぐり、受付で”来館者記帳簿”に名前を記入する。

僕はそこで、ナリタ会長の名前が記帳されている事に気がついた。

- なりたいわお
”成田巖” -

全国展開を果たした家電量販店”ナリタ”創始者である彼は、目指すべき「ビジネスモデル」として業界の注目を浴びていた。

僕はナリタグループのプロパガンダ的ポジションとして、個人契約を締結している。

それに・・・彼と僕は友人だ。（親友と言ってもいい）

マコさんの病室前の長いすに座ってうつむいた会長は、少し疲れ
ているように見えた。

「会長、来てくれたんですか」 ありがとうと僕が言う。
顔を上げた会長の頬に残る涙の跡。

会長は僕の肩を掴み、僕の目をまっすぐに覗き込む。

「・・・水臭いよぉ、タロさんよぉ」

鼻水と涙をたらしながら、会長は拭おうともせずにそう言ったのだ。
ありがとう。僕は会長を抱きしめて少しだけ泣いた。

・・・こぼぽぽ。ウォーターサーバの水音が長い廊下に響いた。
僕達の嗚咽と共に。

> i 2 3 1 8 2 — 1 7 6 7 < <

4・見舞い客 (2005年6月) (後書き)

ご感想、ご指摘、よろしくお願いします。

(名称などの細部は作者の創作です)

5・長い話1（半年前のきっかけについて）（前書き）

過去の追憶からさらに過去のお話を紐解くために分かりにくくなつて行きます。

努力しますのでお付き合いください！

5・長い話1（半年前のきっかけについて）

サナトリウムの食堂は時間の止まった空間のようだ。

もし、ここは50年前の過去なんだよと言われたとしても、僕は信じてしまうと思う。

アルマイトのコップに入ったコーヒーを飲みながら、僕はナリタ会長に長い話を始めた。

- 2004年・12月 -

仕事を終えた僕が自宅マンションの玄関を開けると、電話が鳴っていた。

もしもし、と受話器を上げたところで既に電話は切れていた。

（自宅に固定電話を設置したのは数日前の事だった）

服を部屋着に着替えた僕は、FAX兼用の電話機を見つめながら首を捻る。

- 何か変だな。

心の中で何かが引っ掛かっていた。

窓の外では雨が降り始めていた。

「うーん」 何か大切な事を見逃しているように感じて、僕はぼんやりと想いを巡らせる。

熱いシャワーを浴びても、ビールを注いでも、柔らかい何かを踏んづけているように感じる。

タバコに火を点け、ステレオセットの電源を入れる。

・ラ・カンパネラ（パガニーニによる大練習曲S・141-3）（
F・Liszt）・

静かなピアノのスタッカートが部屋に流れる。

ステレオからランダムに再生されたその曲は、僕の心を静かに揺さぶり始めた。

あれ？あれ？僕はとっさに頬を拭う。

気がつくと僕は泣いていた。

涙は後から後から流れ続けて行く。

僕は何が起こったのかを理解できないまま、その場から動けずにいた。

ピアノ、とネコのかちゅが言ったように感じる。

僕は微笑む。

激しい雨が窓を叩いている。

僕はその瞬間に想い出したのだ。

マコさんと過ごした幸せな日々を。

奇跡の猫・エレーンが同居していた日々を。

このピアノ曲は彼女達のお気に入りだったのだ。

僕はカバンから携帯電話を取り出す。

（携帯電話は電源が入っていなかった）

携帯の電源を入れ直してみると、留守番電話が入っていた。

「・・・お元気ですか、タロちゃん」 その声は・・・マコさん
だった。

何かを伝えたかったのだろう。

何度も悩んで掛けてくれたんだろう。

マコさんの声は、その一言で切れていた。

さよなら、もなく。

またね、もなく。

彼女の伝言は終わっていた。

激しい雨は相変わらず窓を叩き続けていた。

僕は携帯を握り締めたまま、ぼんやりと佇んでいた。

マコさんのお父さんから電話が掛かってきたのは、その日の夜中の事だった。

-
-
-

「く、くりきたけし栗木武です。お、おお、覚えていますか」

朴訥に、しかし暖かい声で話すその人を僕は忘れてなどいなかった。

マコさんのお父さんである彼は、僕とマコさんの交際を快く応援してくれていたのだから。

夜中に掛けた電話を申し訳ないと繰り返す彼に、僕は受話器を持ち替えて「いいんですよ」と答える。

「こちらこそ、長らく連絡もしないでごめんなさい」僕は受話器の向うに頭を下げた。

そして僕は、マコさんとの日々を想い返したのだ。

> i 2 3 2 4 9 — 1 7 6 7 < <

5・長い話1（半年前のきっかけについて）（後書き）

ご感想、ご指摘、よろしくお願いします。

（名称などの細部は作者の創作です）

6・長い話2・追憶・（マコさんとの別れ1）

僕がマコさんと別れたのは、ちょうど一年前の冬の事だった。

- 2003年・12月 -

その頃の僕達はとても幸せに過ごしていた。

地元のケーブルテレビに取り上げられるほど、僕らはぴったりと寄り添って生きていたのだ。

花が咲けば僕達は腕を組んで眺めに行つたし、

渡り鳥が海を越えて飛来すると、僕達はお弁当を抱えて海岸まで眺めに行つたものだ。

マコさんは飲み会で遅くなると、必ず僕に電話を掛けてきたものだった。

「タロひゃん。マコよお。酔っ払ってないよお」 いつも彼女はそう言つて電話をしてくれた。

その度に僕は彼女を迎えに行つたのだ。

その度に彼女は僕に言つたのだ。

- 愛してる。わたしのタロちゃん -

そう言つて僕にキスするマコさんが、僕は大好きだった。

では何故、僕達は別れなければならなかったのか。

それにはエレインの事から説明せねばならないだろう。

その当時、僕の家にはエレーンがいた。
”猫森村”からやってきたその猫は、人語を解し”（猫の世界の）次元”の扉を開く事ができた。
「奇跡の猫」それがエレーンだった。

それは秋も深まったある日の事。

「タロちゃん。ちょっとここに座りなさい」
エレーンは台所のテーブルにちょこんと座り、僕に振り返って話し始めた。

「わたし達ネコ一族の中で、選ばれた者だけに能力が与えられているのは知ってるわよね」
知ってるよ、と僕は答えた。

（詳しくは前作【タロと今夜も眠らない番組】取材旅行28（異なる次元）あたりを参照ください）

「わたしの能力は”次元”を繋げる事だけではないのよ。”予知”も受け継いでいるの」

エレーンはまっすぐに僕の目を見つめると、悲しそうに言葉を続けた。

「タロちゃん。あなたとマコちゃんはとても愛し合っているわよね」
しっぽをまっすぐに伸ばして彼女は言う。

「それでもね、運命は曲げられないのよ」エレーンは目を伏せてしばらく言葉を詰まらせる。

「つまり、どういう事なの？」僕は聞いてみた。

「あなたは・・・マコちゃんから別れを告げられるわ。それは避けようのない事なの」

エレーンは申し訳なさそうにそう言うと、僕の肩に飛び乗った。

「これはあなたとマコちゃんの運命なの。わたしは手を出せないのよ。あなたを守護する”鷹”（たか）にも釘を刺されちゃったの」

- ”鷹” -

彼はかつて猫守村の”天狗”として村を守り、猫族を猫森村へと守り導いた立役者である。

宇宙の真理まで理解できたかつての”天狗”は、”鷹”として今も導いているのだと言う。

そして僕の守護者であるらしい。

（彼の魂は僕の亡き父とも結びついているとも聞いた）

「わたしが伝えられるのはそれだけなの。それからね、わたしは猫森村に帰るわ。また会いましょう」

エレーンはそう言うと、とてもあっさりと猫森村に帰って行ったのだ。

（丸く切り取られた”次元”の穴だけが数分間ちらちらと瞬き、やがて全てが閉じられた）

エレーンが去った翌日から季節は冬を向え、初雪が辺りを埋め尽くした。

> i 2 3 2 9 6 — 1 7 6 7 < <

6・長い話2・追憶・（マコさんとの別れ1）（後書き）

続編なので、いろいろと絡んでおります。

（分かり辛いかも知れない。ごめんなさい）

ご感想、ご指摘、よろしく願います。

（名称などの細部は作者の創作です）

7・長い話3・追憶・（マコさんとの別れ2）

マコさんから電話が掛かってきた時、僕は初雪を眺めていた。

「タロちゃん。何も言わないでわたしのお願いを聞いてね」

携帯電話の向こうから聞こえるマコさんの声には、一切の感情が消されているようだった。

「そして聞き終わったら、そのまま電話を切って欲しいの」

僕は・・・何も言えないまま彼女の言葉を聞いていた。

（運命なのよ、と幻のエレーンがささやく）

「わたし達は、とても良い恋人同士だったと思うわ」 マコさんはしんみりとささやく。

「でもねタロちゃん。運命には逆らえないわ」 きつぱりと彼女はそう言った。

「わたしはねタロちゃん・・・」 彼女が一拍、言葉に詰まる。迷っている様子が伝わる。

「わたしを信じてくれるのなら」と彼女は言葉を続ける。

「わたしと別れて」

雪

はるか上空から降り積もる雪の群れ。

しんと降り続く白く小さな雪が、窓の外から吹き込んでくる。

僕は通話の切れた携帯電話を握り締めたまま、窓の外に顔を出す。

きん、と冷えた空気が僕の顔を包む。

僕の頬から涙が流れ、雪と一緒に溶けては混じる。

そうして・・・僕はマコさんと別れたのだ。

エレーンの予言通りに。

> i 2 3 3 4 1 — 1 7 6 7 <

7・長い話3・追憶・（マコさんとの別れ2）（後書き）

ご感想、ご指摘、よろしくお願いします。

（名称などの細部は作者の創作です）

8・長い話4（半年前のきっかけについて・その続き）

- - -

電話の途中だった事をすっかり忘れて、僕は追憶に想いを馳せていた。

「もしもし、タロさん？」

マコのお父さん（栗木武）の声が受話器から聞こえて、ようやく自分が電話中であつた事に気がつく。

僕は頭を振って意識を戻した。

「マコさんは元気ですか」

僕がそう聞き返すと・・・受話器越しに彼が息を呑む様子が伝わった。

（辺りの空気が急激に冷え込んだように感じた）

そして僕は気がつく。

彼が嗚咽を堪えている事に。

受話器の向うから小さく聞こえるのは、彼（栗木武）の涙をすする音、そして・・・

・ラ・カンパネラ（F・Liszt）・

小さく聞こえるピアノの音は、彼の涙の雫を思わせる。

（マコのお父さんは、奇しくも僕とマコさんの思い出の曲を聴いていたのだ）

「マコさんに何かあったんですね」 僕は姿勢を正して、再び彼に問いかけた。

「・・・マコが・・・お、お、起きないんです」

言葉を詰まらせながら彼は少しずつ話してくれた。
窓を叩く雨の音と、受話器越しに聞こえるピアノをBGMに。

-
-
-

マコさんが僕に別れを告げた後、武さん（マコのお父さん）は何度も言ったそうだった。

別れるべきではないと、何度も何度も言ったそうだった。

しかし、マコさんは頑なに拒んだらしい。

「運命なの」 と言ったそうだった。

そしてある日、武さんはおかしな事に気がつく。
彼女が時折、意識を失うらしい事に。

それは何の前触れもなく起こった。

家でお茶を飲んでいる居間で、友達と出かけたお店の中で、電車の中で、バスの中で・・・

日を追う毎に意識を失う時間は長くなっていった。

彼女はしかし「意識はあった」と言う。

傍目には気絶しているようにしか見えない。しかしその間の記憶はあるのだと言う。

彼女が意識を失う（しかし無意識ではない）時間が2日を超えた時、武さんは彼女を病院に連れて行った。
しかし、検査結果は”異常なし”だったそうだ。

- - -

「い、一週間前なんです。最後に動かなくなったのは」
武さんの声には疲れが滲んでいた。

「マコさんはどこにいるんですか」 と僕は聞いた。会いに行ってもいいかと聞いた。

一ヶ月の検査の後、治療方法も分からないマコさんが収容されたのはサナトリウムだった。

そうして、僕はサナトリウムに通うようになったのだ。

” 眠り病 ”

それが彼女の病名なのだと、僕はナリタ会長に話した。

長い話に付き合ってくれた会長はアルマイトのコップから冷たくなつたコーヒーをすすりながら、何度も頷いた。

「“眠り病”について、わたしは全力で調べましょう。タロさん、わたしらは仲間でしょう？」

サナトリウムから立ち去る時、会長はそう言ってくれた。夕陽に向つて。

ありがとう、と僕はもう一度会長と抱き合う。

「これからは内緒はナシですよ」 会長がウインクをして僕に手を振り、黒塗りのベンツに乗り込んだ。

”健康のために”一人で運転して来たのだと会長は言うが、彼なりに何かを感じて気を利かせたのだと僕には分かっていた。

そういう人なのだ。
優しいのだ。

夕陽に照らされて、サナトリウムを包み込む草原が赤く波打つ。

遠ざかつて行くベンツに向つて僕は手を振った。

「ありがとう」と手を振った。

> i 2 3 3 4 2 — 1 7 6 7 <

8・長い話4（半年前のきっかけについて・その続き）（後書き）

長い話がようやく終わりました。ここから展開して行きます。

ご感想、ご指摘、よろしくお願いします。

（名称などの細部は作者の創作です）

9・マロの日記

武さんが日記を届けてくれたのは、蝉しぐれが激しくなった8月
始めの昼だった。

仕事が休みだった僕は、掃除をしていた。

- Try Jah Love - Third World
(1982)

レゲエ&ソウルに背中を押され、僕の雑巾は家中の汚れを落として
いた。

「せ、精が出ますね」 開け放していた玄関から、武さんが顔を
覗かせる。

目の下にくつきりと現れた隈が、武さんの疲労を物語る。

僕は熱い番茶を沸かしてキッチンテーブルに武さんと共に座った。

「一年ぶりですねえ」 僕は湯のみをすすりながらそう言った。

「う、うん。そ、そ、そんなに経つんだよねえ」 武さんも熱い
番茶を味わいながら頷いた。

これを持ってきたんだ、そう言って武さんがテーブルに置いたのは、日記帳だった。

「な、何かがわかるかと思ってね。マコには悪いけどね。も、もってきたんだ」

タロさんに読んでもらうべきなんだ、と言った武さんの真剣な表情に、僕は大きく頷いた。

その日記帳のタイトルは、マコさんの可愛らしい丸文字でハートマークと共に記されていた。

*** Makos Diary ***

僕達はヒントを求めて日記をめくる。

- 2001' 1. 1 -

- ステキな一日。N・Aのプロパガンダにタロちんが決定！

ああ、新年会で僕がナリタ会長からパートナーに迎えられた日だった。

この日はマコさんも感動して泣いてしまったっけ。

そうつぶやく僕の隣で、武さんはしくしくと泣き始める。

その後の日記は特に目立つものもなく、ただ懐かしい思い出が記されていた。

穏やかな幸せの日々。

それは永遠に続くものと思っていたのだ。

- 2 0 0 3 - 5 . 5 -

- 鷹の夢 . . .

そのページを見た僕達は思わず顔を見合わせた。

夢から覚めてすぐに書き記したとも思えるそれは、それまでとは違
って書きなぐったような筆跡である。

「も、も、もしかしたら . . .」

武さんはその日の事を語り始めた。

武さんがいつものように眠い目を擦りつつ台所に向うと、マコさ
んが座っていたらしい。

彼女は蒼白な顔をしていたそうだ。

父親の呼びかけにも反応せず、いつまでも俯いて座っていたと言う。

「お父さん。運命って信じる？」 出勤するために玄関で靴を履
いていた武さんに、彼女はそう呟いたそうだ。

それからどうなったんです？ と僕は尋ねてみる。

「き、帰宅した時には、い、いつものマコに戻ってたんです」

- - -

それが、日記から分かった全てだ。

いつの間にか、窓から差し込んだ夕陽に照らされて、この部屋はオ
レンジー色に染まっていた。

僕は熱い番茶を継ぎ足して、武さんに言う。

「僕、決めました」 大きく深呼吸をして、武さんに言う。

「彼女の別れは、彼女の本心ではないと感じたんです」

オレンジ色に染まったテーブルを見つめて、武さんは頷く。

「わ、わたしも、そう思う」 そう言って、お茶を啜っては何度も頷いた。

「僕は決めました」 武さんがぼんやりと僕を見るのを確認して、言葉を繋げる。

「マコさんとは別れません。応援してくれますか？」
もちろんだよ！と武さんが僕の手を硬く握る。

そのようにして僕は、眠り続けるマコさんの許可もなく、お義父さんの許可をもらったのだ。

（それを知ったらマコさんは怒るだろうか）

2005年8月の大きな夕陽が、全てを染めていた。

> i 1 4 0 8 5 — 1 7 6 7 <

9 マロの日記（後書き）

ご感想、ご指摘、よろしく願います。

10・タロの終わらない番組（不思議なウワサ）

- ぷっぷっぷーん。

- みんな元気！僕は今日も元気だよ

- 昼下がりのひと時を、DJタロがお邪魔します！

- ”タロの終わらない番組” 始まるよ！

PAミキサーの音量を緩やかに引き上げる。

- ラ・ラ・ミーンズ・アイ・ラブ・ユー・スウィング・アウト・
シスター

l a l a l a l a . . . I l o v e y o u

晴れ上がった夏の空に、その曲は溶け込んでゆく。

- タロちゃんの選ぶ曲を聞くと、いつも幸せな気持ちになるわ
頭の中で幻の声が聞こえる。

彼女の眠る病室で、僕の番組が流れているはずなのだ。

聞こえているだろうか。

聞こえるといいな、と僕は祈るのだ。

- - -

リスナーさんからの手紙が届いていた。

- ハロー！タロさんの番組、いつも楽しみにしています。
- わたしの学校で、不思議な話が流行ってるの。今日はそれを紹介しますね。
- わたし達の世界とは違う世界があるんだって。
- その世界は、なんと、人間の身体と同じ成り立ちをしているらしいの。
- その入り口は、口^{くち}なんだって。
- そういう夢を、見た人が最近増えているってウワサなのよ。
- タロさんはどう思う？

．．．

- うーむ。不思議な話がブームになっているのですねえ。
- それが本当にあつたら．．．僕も行ってみたいなあ。
- それでは、リクエストにお答えして。

- OPEN UP MY WINDOW - クリスタファー・クロス

青空に浮かんだ白い雲が、スタジオの向こうの廊下の窓からふわふわと浮かんでいて
リクエスト曲とんだかよく合っていた。

リスナーさんの不思議な話が後に現実となる事など、その時の僕はまだ知らなかったのだ。

> i 2 1 5 1 3 — 1 7 6 7 <

10・タロの終わらない番組（不思議なウワサ）（後書き）

ファンタジーの予感？

ようやくカードが揃い始めました！

ご感想、ご指摘、よろしく願います。

（名称などの細部は作者の創作です）

11・受付のせつちゃん

あたしは節子。

N・A・事務局のみんなからは「せつちゃん」と呼ばれている。

わたしは受付に座って、毎日をのんきに過ごしていた。

タジマ局長の後姿をうつとりと眺めたり、「本日の占い」を本気で信じたり、アタル室長のお茶を出し忘れたり、そんな風に毎日を楽しく過ごしていた。

そんなある日、マコが入社して来たのは2000年の春だった。
(もう5年も経つんだわ！)

- 都会からキャリアアウーマンが来る！ -

あたしたちの間にまさしく激震が走った瞬間だった。

どんなに性格が悪いんだろう、とか

あたしたちの仕事を叩いて周るに違いない、とか

タジマ局長の恋人だわ、とか。

あたしたちは色んなことを言い合ったの。

ところが・・・やって来た彼女はふんわりと優しく暖かい、まるで”春”そのもののようなステキな女性だった。

あたしたちはすっかりマコを好きになったわ。

だって彼女は、あたしたちを無条件で好きになってくれたんだもの。

そんな彼女には”タロ”という恋人がいたわ。

マコは”タロ”の事を愛していた。(それはもう盲目的なほどに)

みんなは2人の事を心から祝福していたし、応援していたけれど、あたしは危ないなって思っていたわ。だって、話がうますぎるんだもん。

局長だけでなくナリタ会長までが”タロ”を信頼していた。盲目的なほどに。

けれどあたしは疑った。

だってあの男はここに来る前は東京のクラブDJやってたらしいの。しかもマコの姉はそのクラブに通って死んじやったらしいし、その後でマコに擦り寄ったって噂だもの。

みんなの目を騙せても、節子の目はごまかせないんだから。

そんなマコが笑わなくなったのは2年前。

あたしは心配になって色々相談に乗ろうとしたわ。けれど彼女は寂しそうに微笑んで首を振った。

やがて彼女が”タロ”と別れたらしいと局内に噂が周ったの。

あたしは”タロ”を密かに憎んだわ。

あたしの憧れを、あたしの希望のマコを幸せにしないなんて、許せないもの。

マコが突然仕事に来なくなったのは1年前。

それ以来マコは誰にも連絡を取る事もせず・・・あたしたちの前から姿を消したのだ。

そして1年後、あたしは真実を知ることになる。

$$\begin{array}{r}
 > \\
 & i \\
 & 2 \\
 & 0 \\
 & 0 \\
 & 4 \\
 & 6 \\
 \hline
 & 1 \\
 & 7 \\
 & 6 \\
 & 7 \\
 & <
 \end{array}$$

11・受付のせつちゃん（後書き）

せつちゃん登場！

ご感想、ご指摘、よろしくお願いします。
（名称などの細部は作者の創作です）

12・受付のせつちゃん2

その日、あたしは不思議な夢を見た。

夢の中で、あたしは駅前のコーヒーストップに座っている。

あたしの目の前で微笑んでいるのは・・・マコ。

「あなた、誤解してるわ」 マコが寂しそうにささやく。

誤解？なにを？ あたしはマコに向ってそうつぶやく。

彼女はゆっくりとした口調でささやく。

「あなたは誤解してる。タロちゃんと別れたのはわたしの方なのよ。ウソだと思うなら、わたしの家に来て」

そこで店内は急に暗くなり・・・夢が覚めたのだ。

- - -

目が覚めても、その夢はあたしの中で奇妙に現実味を帯びていた。

・・・それから3時間後、あたしはマコの家で彼女のお父さんとお茶を飲んでいた。

たまたま休日であった事や、たまたまマコの家の電話番号があたしの携帯電話に残っていた事。

たまたまマコのお父さんも仕事が休みで暇だった事。

そんな偶然が重なったおかげで、あたしは彼女のお父さんに招かれたのだ。

せっかくだから、あたしは教えてもらうことにしたのだ、あたしの知らないマコの事やタロの事を。

「せ、せっちゃんのこと、ま、ま、マコはいつも話してましたよ」拙い話し方でありながら、マコのお父さんは純朴な人だった。

そうして、ようやくあたしは分かったの。

とんでもない勘違いをしていた事を。

タロさんに包まれて、彼女がどれほど幸せだったのかを。別れてもなお、彼女を見守り続けるタロさんの一途さを。

もしかしたら彼女は、どうにも仕方の無い理由で彼と別れるに至ったのかも知れない。

（これは女の勘よ）

でもその理由は・・・彼女が再び目覚めるまで永遠に謎のままである。

あたしは節子。

今日からあたしは、タロさんのファンである。

> i 1 3 9 8 1 — 1 7 6 7 <

12・受付のせつちゃん2 (後書き)

せつちゃんでした

ご感想、ご指摘、よろしくお願いします。

(名称などの細部は作者の創作です)

13・鷹の啓示

僕は夢の中で目覚めていた。

もちろん「夢の中で目覚める」とはおかしな表現である。
しかしそれ以外に表現のしようがなかったのだ。

僕は目覚めた瞬間にここが夢の世界である事をはっきりと自覚していた。

窓に掛かったカーテンを開け、窓を開けて空を見上げる。

夜の空には数え切れない数の星がちらちらと瞬く。

僕は夜空をじっと見つめて…その時を待ち続けた。

星屑に満たされた空。

その一画がゆらゆらと揺らぎ始める。

しばらく眺めていると、淡い霧状の渦が少しずつ広がり始める。

- 感傷的なワルツ (Sentimental Waltz) -
チャイコフスキー

すすり泣くようなチェロの音色がどこから聞こえてくる。

僕は自覚していた。

僕が見ている夜空の彩りは、僕の瞳とリンクし始めているのだ。

瞳の中で鮮やかな色彩がゆっくりと廻り始め、次第にその回転は速度を増して行く。

僕の瞳から涙が溢れる。

『ようやく目覚めたな。幸一』

その瞬間、僕は宇宙空間にふんわりと浮かんでいた。

『右手を』

僕は右手を真っ直ぐに伸ばし、天高く腕を掲げた。
親指をしっかりと伸ばして僕は受け入れるのだ。

そうして僕の右手に”鷹”が留まった。

彼の鋭い爪が僕の親指に食い込み、温かい血が一筋流れる。

お久しぶりです、と僕は鷹に言う。

『5年だ』と鷹が言う。

『5年の間、わたしはお前から離れなければならなかった。これも運命だ』

僕は頷く。たぶんそうなんだろうなと、僕には理解できていたような気がするのだ。

『沈黙の5年間、お前は”待ち続ける試練”を受けた訳だ。・・・そして』

そう言うと鷹は金色の羽を大きく広げ、目の前に大きな映像を映し出した。

『そして、マコさんを巻き込んだ』

映し出されたそれは、病室で眠るマコさんの姿だった。

・マコさんを巻き込んだ・

僕はめまいを感じて奥歯を強く噛み締めた。

> i 1 4 9 4 5 — 1 7 6 7 <

13 鷹の啓示（後書き）

ご感想、ご指摘、よろしくお願いします。
（名称などの細部は作者の創作です）

14・鷹の啓示2

僕は5年前、”鷹”のご加護を受けた。

そして僕は、何者にも成らず、無為に過ごしてきたつもりだった。それで良いとも思っていたのだ。

しかし、マコさんを巻き込んでいたと言う。

何が正しい道なのか、普通に過ごす事にしがみついてはいけなかったのか。

僕は分からなくなっていたのだ。

『人はみな成長するのだ』 真空の宇宙空間で鷹は僕に伝えてくる。

『人はなぜ生きるのか。なぜ生きた瞬間から死の呪縛を抱えるのか。お前に分かるか？』

彼の言葉が鋭い爪と共に僕の心へと食い込む。

わからないんだ、と僕はささやく。

『お前は、お前である事を避けられないのだよ』 少しだけ、鷹の口調が柔らかくなったように感じる。

『幸一』 鷹が僕の本名を呼ぶ。（亡くなった父親のように）
『お前は既に与えられた。その力を自分の物にしなければならぬ。真理は全てに満ちているのだ。それをお前は自分で見つけなければならぬのだ』

また会おう、と言つぶやいた鷹は、両の翼を羽ばたいて星の闇へと消えていった。

その瞬間から僕は、空気を求めてもがいた。

僕の視界に地球が映る。

意識が先に地表へと届く。

どんつという地響きと共に僕の意識が遠くなる。
（身体は大地に還った事を認識していた）

そして、夢が唐突に終わりを告げた。

僕は全身で息を吸った。夢中で呼吸を続けた。

- 真理は全てに満ちている -

その言葉はいつまでも僕の心に刻み込まれたのだ。

> i 1 6 3 0 3 — 1 7 6 7 <

14・鷹の啓示2（後書き）

ご感想、ご指摘、よろしくお願いします。
（名称などの細部は作者の創作です）

15・せつちゃん、タロに会う

あたしは節子。マコとタロのファンである。

あたしは数日前まで誤解し続けていた彼らの為に、何かできないかと思ったの。

あたしは彼女のお父さんから教えてもらったわ。

マコが”眠り病”なる病のためにサナトリウムで眠り続けていることを。

そんなマコさんを、毎日のように見舞い続けるタロさんの事も教えてもらった。

あたしはそれを聞いて、目からウロコが零れ落ちる思いだったわ。ポロポロと。

あ、もちろんあたしの目からウロコなんて出てきやしないわよ。(目やにくらいは出るけどさ)

そしてあたしは今日、タロがDJを勤めているラジオ局にやって来た。

観覧希望の受付を済ませたあたしは、館内の「収録スタジオ」の矢印に従って観覧スペースにたどり着いたの。

観覧スペースはとてこざっぱりとした場所だった。

あたしは収録スタジオを小窓からそつと覗いてみた。

そこには、スタンドマイクを前にミキサーやCDを操作するタロさんの姿が見えた。

「ぷっぷっぷーん。」

「みんな元気！僕は今日も元気だよ

「昼下がりのひと時を、DJタロがお邪魔します！

「タロの終わらない番組」始まるよ！

ふーん。こうやって番組を放送しているのねえ。

窓に張り付くように見つめていると、背後に誰かの気配を感じて、あたしは慌てて窓から離れた。

「タロさんのファンですか？」 背後からしゃがれた声。

あたしの後ろに立っていたのは・・・スキンヘッドにサングラス、丸く太った中年男性。

こ、怖い。

思わず身体がすくみ動けないあたしを見て、その男性は黒いジャケットの懷から何かを取り出す素振りを見せた。

う、撃たれる！

ひえっ、と顔を手で覆った。

「・・・わたし、こういう者です」

低くしゃがれた声でそう言った

肩をすくめてサングラスを外したその男が差し出したのは、一枚

の名刺だった。

- 猫山一郎 -

彼はペット用品大手の「アニマル・トイズ」の代表取締役社長だと言う。

そこでようやくあたしは思い出す。

「ひとつとして…、タロさんがドキュメンタリー番組に出た時、”猫森村”を探す旅でタジマ局長と一緒に映っていた方ですか？」
あたしがそう言うと、猫山さんは恰幅の良い体を揺らさせてにっこりと頷いた。

- - -

番組が終わるまでの間、猫山さんはタロさんの事をたくさん話して聞かせてくれた。

そのおかげで、タロさんのイメージはあたしの中で全く違ったものに変化していったわ。

しゃべる猫ちゃんに信頼されたタロさん。

ナリタ会長の甥のツヨシ君を正しく導いたタロさん。

天涯孤独のタロさん。

優しいタロさん。

困っちゃったな、とあたしは思い始めていた。

あたしは理解しちゃったの、マコがタロさんを盲目的に愛した気持

ちを。

窓から見え隠れするタロさんの後姿が、館内に響くタロさんの声が、あたしの心をほんわりと包みこんでいた。

あたしは猫山さんにお礼を言い、タロさんの番組が終わる前にラジ才局を後にした。

（ああ、困ったな）

見上げた空には、8月の太陽が大きく燃えていた。

> i 2 3 8 3 8 — 1 7 6 7 <

15・せつちゃん、タロに会う（後書き）

困ったせつちゃんでした。

ご感想、ご指摘、よろしくお願いします。

（名称などの細部は作者の創作です）

16・会長とタジマとチキンライス

2005年10月。

僕は久しぶりにナリタ会長の屋敷を訪れていた。

あれほど鳴り響いていた蝉せみぐれ時雨は既に鳴り止め、赤とんぼが林の間を飛び回っている。

「タロさんの料理、久しぶりに楽しみですわい。がははっ。なあタジマ」

作務衣さむえを着て寛いだ会長が嬉しそうにそう言うと、タジマがにっこりと頷いた。

「そうですね。会長、タロさんの料理だけは残さず食べるんです」
タジマが水玉のエプロンをジャージの上に掛けながら僕に微笑む。
（N・A・局長のタジマも、僕や会長の前ではいつも寛いでしまうのだ）

会長の屋敷に来たときの常として、僕とタジマは台所で料理を作っていた。

「ところでタロさん、ニンニクと鷹の爪をオリーブオイルで炒めるのって、やっぱりパスタですか？」

（料理をする時のタジマは僕のサポートに徹してくれていた）

「あはは。これからチキンライス作るんです。下地の段階でパスタにも応用できてしまっんですよ」

僕がそう言つと、タジマが手帳を取り出して書き込んでいた。勉強になります、と言うタジマは実に勤勉なのだ。（とても権力者には見えない・・・まあ、見た目はヤクザなのだけれど）

僕はフライパンから一度ニンニクと鷹の爪を取り出し、玉ねぎとピーマンと鶏肉を炒めた。

塩コショウと砂糖で整えて赤ワインを少し。

そうしてホールトマトを入れてつぶし、醤油を少し、バター、ケチヤップ、粉チーズでソースが完成する。

ご飯をフライパンに入れ、ソースを加えながら炒める。

- 『ちきんらいすのナポリタン風』 -

料理を取り分けた皿を居間に並べて、僕達は思い思いのお酒を手に掲げた。

「再開を祝して！」 「乾杯！」 ナリタ会長の声に、僕もタジマも答えた。

「うまいなあ」 お酒もそこそこで、実に美味しそうに会長は味わってくれる。

「無性に喫茶店で食べたくなるんですよえ」 いつもクールなタジマ局長も、このチープな喫茶店風味には堪らないものがあるようだ。

そして、１５分ほどで美味しく食べつくした僕達は、のんびりとお酒を飲み始めた。

いつの間にか陽は暮れ、涼やかな冷風が会長の小さな屋敷を吹き抜けて行った。

もう秋なのだ。

> i 2 4 8 5 6
— 1 7 6 7
<

16・会長とタジマとチキンライス（後書き）

節目に掛かっているために更新が滞っています。

でもちゃんと続けますのでよければ応援お願いいたします！！

ご感想、ご指摘、よろしく願います。

（名称などの細部は作者の創作です）

17・N・A・Reports

「そうだ、忘れておったわい」

ひとしきりお酒を酌み交わした後で、ナリタ会長が僕に差し出したのは一冊のレポートだった。

「まあ、読んでみてください」 会長に促されて、僕はレポートを捲^{めく}った。

「会長、これって・・・」 ページを捲り言葉を失う僕のことを、会長は優しく見つめた。

『ナリタ・レポート』と題されたその内容は - ”眠り病” - に関する膨大な調査結果が纏められたものだった。

「もつと分かりやすく見せましょう」 そう言った会長はタジマに頷く。

タジマが居間の壁に仕込まれたスイッチを操作する。

古めかしい居間の天井部分から、真っ白なスクリーンがするすると音もなく下りてきた。

スイッチの横のパネルがゆっくりと開き、本格的なコンピュータが壁から迫り出してくる。

コンピュータの電源に連動し、スクリーン反対側の壁に設置されたプロジェクターが光る。

そして大きなスクリーンにはコンピュータ画面が投影された。

「驚きましたかな？がははは」 いたずらっぽく笑う会長とタジマ。

「そりゃあ驚きますよ。この平屋に近代設備なんてねえ」 と僕は肩をすくめた。

この人たちにはかなわないな、と僕は改めて思ったのだ。

- - -

タジマが操作するコンピュータ画面が古い屋敷の壁一面に大きく映し出される。

” T O P - S E C R E T (N . A . R e p o r t s) ”

「これね、まだ世界中に内緒なんですわ」

極秘と記されたそのドキュメントを指差して、会長が言う。

タジマがドキュメントファイルを次々とめくる。

そこには、我々にも馴染み深い、長い眠りから覚めない伝説のお姫様のお話も含まれていた。

・・・あの話は、お伽噺じゃなかったのか？

タジマと会長は多岐に渡り調べつくしたそうだ。

・ 胎児が眠り続ける - C o m a B a b y (昏睡胎児) -
・ 2週間も眠り続けた事例もある - 周期性傾眠症 (K l e i n e - L e v i n 症候群) -
・ 脈絡もなく眠る - n a r c o l e p s y ナルコレプシー (居眠り病) -

などなど・・・

「マコさんの”眠り病”は、極めて特異な例のようですね」 ドキユメントファイルを捲りつつ、タジマは言う。

「通常、マコさんのように長期間眠り続けるのは”植物”状態と言われます」 タジマはためらいつつもきっぱりと言った。

「しかしマコさんの場合、トリガーとなるべき事象が見当たらないのです」 そう言うと、タジマはファイルを閉じた。

「タロさん」 と会長が口を開く。

「実はこの症例に、各国の軍部が興味を示しています」 会長の目が険しくなる。

まさか、と僕は肩をすくめる。

「タロさん、奴らは本気ですぞ。何年も眠らせる病気、これがどれほど利用価値があるかを想像できますかな？」

会長は袖を肩口まで捲くり上げて、刺青を隠しめせず僕に身を乗り出す。

僕はしばらく想像してみる。

「うーん・・・都合よく邪魔なフィクサー（影の権力者）を何年も眠らせる材料になる、とか？」僕はなるべくさらっと口にしてみる。

その途端・・・部屋の空気が重く固まったのが肌で分かった。会長とタジマが強張った顔で頷いたからだ。

わたしは経験から知っていた。彼等はこんな場面で冗談など言わないのだ。

「まずいなあ」 と僕はため息を吐く。
どうやら僕一人の胸には収まりきらないところまで物語は進んでいくようだ。

そうして僕は仕方なく、先日見た”夢”の話を会長達に話したのだ。

お伽噺だと笑われるのを覚悟で。

- - -

僕の話聞いた会長とタジマは次のような事を提案した。

「わたしは以前、猫森村でタロさんが鷹や猫ちゃんに導かれる様子を目の当たりにしました」

タジマはかつての取材旅行を回想しながら話し始めた。

「今思えば、あれは貴重な経験でしたね」 とても嬉しそうにタジマが言う。

「わたしも立会いたかったですな」 会長は残念そうに言う。

「そこで提案です」 とても真面目な面持ちでタジマが身を乗り出す。

「あなたの”鷹”が啓示を与えたのなら、それは現実となるでしょう。それをわたしは確信します」

わたしもだ、と会長が大きく頷く。

会長とタジマは言う、マコさんの症例はいずれ世界の脅威に繋がるだろうと。

それを治癒する可能性を世界中が望むだろう事を。

「これからのやり方は・・・タロさん、あんたが決めてください。何でも協力しますわい。だから・・・わしらに”奇跡”を見せてはくれまいか」

僕はわかっていたのだ。

会長もタジマも、僕の事を、僕の大切なマコさんの事を、常識に囚われることなく助けようとしているのだ。

「わかりました。ありがとう」 と僕は二人に頭を下げた。
「その時が来たら、ぜひ協力してくださいね」

「もちろん」 会長とタジマが声を揃えた。

・その時・は、あつという間にやって来る事になる。

> i 1 3 4 9 7 — 1 7 6 7 <

17・N・A・Reports (後書き)

更新が遅くて申し訳ないです
まだこの先を書いてなくて・・・
がんばりまっす!!

18・マコ・夢の洞窟

草原を渡る風がサナトリウムに流れ込み、わたしは秋の香りに気付いた。

病室で揺れるカーテンに煽られて、テーブルに置かれた花束が香る。いつものようにタロちゃんの優しい声がラジオから聞こえる。

- ザ・クリスマス・ソング - (Nat King Cole)

またタロちゃんは掛けてくれた。
わたしのお気に入りを。

ああ、神様。

わたしは起きているわ。

少なくとも一日の半分くらいは、意識があるのよ。

でも、それは誰にも伝わらない。

そうしてわたしは意識が薄れて行くのだ、ナットキングコールの
素朴な歌声に包まれて。

幻の雪に包まれて、意識の淵から零れてゆく。

- - -

辺りに漂うのは白い霧。

そうしてわたしは、いつものように白い霧の漂うほの暗い洞窟に座っていた。

滑らかな質感の地面は時折仄かに光を発しているようだ。

その光源は、足元に転がる水晶体とリンクしているようである。
(

呼応して点滅しているようだから)

近寄って目を凝らすと何かの結晶が煌めいているように見える。
わたしはここが”現実の世界ではない”と感じているけれど、同時に”真実の世界である”と感じている。

ここはまるで・

(それを説明するには、ボキャブラリーが不足しているようだが、とわたしはため息をついた)

『マコー!』

わたしの耳を捉えたのは、懐かしい友達の声。

「せつちゃん!？」

彼女の名を呼んだ瞬間、目の前の壁から彼女はふわっと現れた。

「マコなの?」とせつちゃんが目をしばたたかせて問いかける。
そうよ、とわたしは答えた。

わたしたちは久しぶりの再会に手を取り合って喜んだのだ。

せつちゃんに触れた瞬間、モノクローム色の景色がゆっくりと揺ら

めいた。

わたしは彼女の感情を身の中に感じたのだ。
それは不思議な感覚だった。

そうしてわたしは知ったのだ。

彼女が何を伝えたいのかを。

> i 1 5 4 4 1 — 1 7 6 7 <

18・マコ・夢の洞窟（後書き）

こ、更新が遅くてすみません！

人名を修正：さっちゃん せっちゃん

19・マコ・夢の洞窟2

わたしはせつちゃんを洞窟の片隅に座らせて、彼女の話聞くべく部屋の装いを改めることにした。

（ここはわたしの”夢”そのものであり、わたしの想いに応じてこの場所は変化するのだ）

わたしはそつと床を撫でる。

それに呼応して床一面が仄かに光る。

光に包まれたわたしの洞窟が、その姿を鮮やかに変えて行った。

「これ・・・マコの部屋？」

せつちゃんがびっくりした顔のままですぶやいた。

「正確には、良く分からないのよ。ここがどこなんだか」

わたしはそう言つと、わたしの部屋そっくりのに設置された戸棚から紅茶のティーパックを取り出した。

どうぞ、と差し出した紅茶セットを戸惑いながら受け取ると、せつちゃんはようやく落ち着きを取り戻したようだ。

せつちゃんはティーカップを抱えて、その部屋を見渡した。

出窓からは陽光がキラキラと差込み、壁には張り替えたばかりのよな壁紙が白く煌く。

ここが、マコの現実の部屋でなくて、なんなのだと言うのか。

せつちゃんは改めて戸惑うばかりだ。

「せつちゃん。あなた、以前にもわたしと”ここ”で会ってるわね」

「え？どういうこと？」　せつちゃんは再び戸惑う。

そうしてわたしは説明を始めたのだ。この不思議な夢の世界の話を。

前回、せつちゃんがここを訪ねて来た時、わたしの世界は彼女の夢と一時的にリンクされていたらしい。

「その時、ここは”駅前のコーヒーショップ”だったわ。

覚えてるかしら。あなたはタロちゃんの事を誤解して憎んでいたでしょう？

でもその誤解は解けたようね」

彼女が記憶を結びつなぐのを待って、わたしは肝心な事を聞いてみる事にした。

「あなた、どうやってここに来たの？」

紅茶が香る部屋の中で、せつちゃんはゆっくりと口を開いた。

> i 2 6 0 3 8 — 1 7 6 7 <

19・マコ・夢の洞窟2 (後書き)

ご感想、ご指摘、よろしくお願いします。
(名称などの細部は作者の創作です)

人名を修正：さっちゃん せっちゃん

20・マコ・夢の洞窟3 くせっちゃんは語る

直接関係があるのかどうかもわからないけれど、と前置きをしてせっちゃんは語る。

それは以前の夢でマコと会う直前のこと。

せっちゃんは寝付けず何度も寝返りを打ってはうまく眠りを誘おうと試みていた。

数時間の試みの上で、彼女は眠りやすそうな音楽を流してみることにした。

- M u m u k i - (A s t o r P i a z z o l l a a n d
G i d o n K r e m e r)

チェロ・ピアノ・バイオリン・アコーディオンで奏でる幻想的なバラード曲はせっちゃんを優しく包み、眠りへと導いていった。

やがて彼女は不思議な夢を見る。

(それは彼女の選曲した曲のせいなのかもしれない。彼女は選曲を間違えたと感じたようだ)

何の前触れもなく幾何学的な光彩と共に彼女の目の前に現れたのは、一匹の猫だった。

(猫のシッポは音楽に合わせてぴょんぴょんと揺れては跳ねていた)

その猫は夢の中で彼女に向かって流暢に話しかけた。

『こんばんは、せっちゃん。そして、始めまして』

こんばんわ、とせつちゃんは猫ちゃんの挨拶を受けてお辞儀をする。

『ステキな曲を聴いているのね。』

そう言う猫は、せつちゃんの肩にひらりと飛び乗った。

『わたしは”エレーン”。よろしくね』

そうしてエレーンはあたしに向って不思議な言葉を語ったのだ。

・デルタ・ロメオ・エコー・アルファ・マイク・オスカー・フォックス
ストロット・マイク・アルファ・キロ・オスカー・

！！

せつちゃんはその言葉を聞いた瞬間、不思議な感覚に陥る。

古い記憶〃今は亡き曾祖父から夢物語で教わったあるコードを想い出したのだ。

彼女は染み付いた（古き）暗号を言葉に変換した。

” d r e a m o f m a k o ”

彼女の言葉に呼応したかのように、ぶわっと白い霧が自分の周りを包んでいった。

そして気がつく、彼女は”喫茶店”の夢の中にいたのだ。

- -

その言葉は、彼女が祖父から教わった古い軍事暗号”フォネティックコード”を読み取った言葉だった。

（現在も生き続けるその暗号はアルファベットの頭文字から成り立っている）

-

そうして彼女は”夢”を通じてマコと出会っていたのだ。

今回も眠りに落ちながら同じ暗号をささやいたらしい。

「面白いわね」　せつちゃんの話聞いて、マコは関心を示した。
「エレーンが導いたのね」マコは嬉しそうに逡巡する。

「エレーン・・・そう！その猫ちゃんなのよ！」

その猫ちゃんが何か知ってるの？　とせつちゃんが身を乗り出す。

そうしてマコは説明する事にした。

エレーンの秘密を。

不思議な力を持った特異な猫、エレーン。

^{エレーン}彼女は人間と会話もできれば、別の次元へと移動も出来るらしい。
謎を秘めた猫ちゃんのだと、マコは説明した。

それでも、とマコは付け加えた。

これまでエレーンは、タロの為にしか行動を示した事などなかったのだと。

だから、せつちゃんとマコに関わった事にとっても驚いているのだ。

これも運命なのかしら、とマコは首を傾げてそんな事を思う。

「せつちゃんにお願いがあるの」　しばらく逡巡した後で、マコはせつちゃんにそう話しかけた。

「いいわよ、何でも力になるわ」　せつちゃんは拳で胸をトンと叩いてみせる。

- - -

マコとの再開を終えたせつちゃんは、自分の部屋のベッドの上で放心していた。

彼女はさっきまでの出来事を想い返してみる。
部屋に流れるタンゴ曲を聞きながら。

自分に一体何が起こってしまったのか。
あの体験は真実なのだろうか。

ひよっとして、自分は気が触れてしまったのではないのか。
そんな事を考えあぐねているうちに、やがて大きな睡魔が彼女を訪れる。

とりあえず寝ましよう、と彼女は思う。

（明日を待つてそれからまた考えようと目を瞑る）

- タロちゃんに伝えて -

意識の途切れ行く狭間で、マコの言葉が蘇った。

窓の外には星が音もなく煌いていた。

20・マコ・夢の洞窟3 くせつちゃんは語る (後書き)

ご感想、ご指摘、よろしくお願いします。

(名称などの細部は作者の創作です)

18・19話の一部誤植を修正しました

21・タロの架け橋1

- ぷっぷっぷーん。
- みんな元気！？ 10月だと言うのにまだ暑いねえ。
- 昼下がりのひと時を、DJタロがお邪魔しまーす！
- ”タロの終わらない番組” 始まるよ！

その日の番組テーマは”旅”についてだった。

リスナー”ヒゲ”さんは、提案型リスナーとして度々番組テーマを与えてくれていて、その日もありがたくお題を番組に取り上げさせて頂いたのだ。

ヒゲさんはこんなメールで提案してくれた。

- こんにちは。タロさん。
- 早速ですけど・・・
- 旅はいいよねえ。
- 旅は人を大きくするよねえ。
- ”旅” - have a nice Trip! - 旅行代理店のそんなタイトルを見るとついフラフラ〜って入っていつては旅先に想いを馳せつつ妄想しちゃうよねえ。
- ああ、ええなあ・・・ひと時のお・も・い・で

実に頭がトリップしていて魅力的！などと微笑みつつ紹介したところ、つられて幾人もテーマに載せた思い出話などが番組に寄せられた。

（ちなみにヒゲさんは番組によって文体を選んでいるそうである。

実に芸が細かい)

一通のリクエストが届いたのは番組の終了間際だった。

- タロさん、わたし思ってます。
- 旅が楽しくありえるのは、きっと帰る場所があるからなんだろうと。

- わたしの親友は困ったことに旅先から帰れないままなの。
- 旅先がどんなに快適であっても、おそらくとても辛い事なのだろうな。

- そんな親友の為にリクエストをしました。
- 彼女の為に、ぜひ聴かせてください。

リスエストは”ホームにて - 中島みゆき - ” (1977)

懐かしくて暖かい、しかし切ない歌声が番組に流れた。
故郷行きの列車に乗ることができないと歌詞が流れる。

それは古いフォークソング。

しかしその曲を聴いた僕は・・・

そう、僕はマコさんの事を想ってしまふ。

やがてエンディングテーマに切り替わり、番組は終了する。

DJブースを片付けて防音ドアを開けた僕の目の前にいたのは、
小柄なOLさんだった。

誰だっけな。どこかで見かけたんだけどなあ。僕は拙い記憶をたぐ
る。(昔から顔と名前を覚えるのが下手なのだ)

「お久しぶりです、タロさん。あたし、節子です。N・A・の受

付の」

そう言つてぺこりと頭を下げる女性を見て、ようやく僕は彼女の事を思い出した。

「ああ、受付のせつちゃん！」そのニックネームはマコさんからよく聞いていたものだ。

「じゃあ、この前ここから覗いてたのは、さつちゃんだったの？」僕はその日、猫山さんがここで待っていたのを思い出す。

（猫山さんは「タロさんも隅に置けませんな。ふっふっふっ、ぐっふっふ」と思わせぶりに笑ったのだ）

猫山さんには絶対に誤解を解かねばならない、と僕はぎりぎり奥歯をかみ締めた。

ところで、僕は聞いてみる。

「さっきのリクエスト、ひよつとしてせつちゃんのこと？」

彼女はショートヘアをぶんぶん振って大きく頷いた。

ふわふわとしたショートヘアが揺れ、猫じゃらしのそののようだなと僕は微笑ましく感じた。

> i 2 6 6 0 0 — 1 7 6 7 <

21・タロの架け橋1 (後書き)

更新遅筆ですみません。。

(名称などの細部は作者の創作です)

22・タロの架け橋2

せつちゃんは何故あのようなクエストをしたのか。
それには理由があるらしい。

そこで僕は彼女を食事に誘う事にしたのだ。
(もちろんやましい気持ちはない。ないって！あ、信じてないでしょ！マコさんに誓うもんね！！指切った！)

- - -

30分後、僕達はラジオ局から歩いて程近い場所にあるイタリアンレストランの片隅に座っていた。

白と緑のクロスが掛かった四角いテーブルには小さなキャンドルが灯っている。

ここは良くラジオ局の若い局員達が利用していると聞いていた。
”少ない予算でもっとも美味しい料理を楽しめる”と評判なのだ。

「良く利用されてるんですか？」　せつちゃんが店の様子をキョロキョロと楽しそうに眺めつつ僕に訪ねた。

「いや、実は初めて来るんです。局の人たちがお勧めの店だったよ
く噂してたもんだから、どうかなって思ってた」
僕もメニューを眺めながら答える。

「ご注文はお決まりでしょうか」　黒服のウェ이터が厳かに話しかける。

せつちゃんは慌ててメニューを眺める。

僕は”トマトとモツアレラチーズのパスタ”と”グリーンサラダ”をお願いする。

「えっと、えっとね」　せつちゃんは決めかねてメニューを捲り続けている。

僕はウェイターさんに聞いてみた。

「女性にお勧めのメニューはありますか」

そうですね、と表情を和らげて黒服がメニューの一箇所を指差す。
「”トマトとルッコラのサラダ”と」　さらにメニューを捲り、とんとんと指を刺す。

「”ベネチア産イカ墨のパスタ”がお勧めですな。イカ墨にはヒアルロン酸などに代表されるムコ多糖類が含まれておりまして、女性に大変評判がよろしいようです」

「じゃあ、それをお願い」　とせつちゃんは微笑んだ。

につこりと微笑み返した黒服は優雅に一礼すると厨房へと消えて行った。

黒服と入れ替わるように現れた女性スタッフが、僕達のテーブルに数枚の紙切れとえんぴつを置く。

「このリストに好きな曲を書いてリクエストできます。聴けるかどうかは運次第なの。ではごゆっくり!」

女性スタッフはそう言つと、ステップを効かせてくるりとターンして次のテーブルへと移動する。

「リクエストかあ、ふふ」　せつちゃんは嬉しそうに笑う。

「タロさんにリクエストさせる機会なんて、貴重だわ」

まあ運良くCDが掛ければ楽しいよね、と僕達はリクエスト曲を慎重に吟味し始めた。

> i 1 2 6 1 7 — 1 7 6 7 <

22・タロの架け橋2 (後書き)

ご感想、ご指摘、よろしくお願いします。
(名称などの細部は作者の創作です)

23・タロの架け橋3

せつちゃんが選んだ一曲は、ピアソラのムムーキだ。

「ずいぶん渋いのを知ってますね」　せつちゃんがピアソラを聴くなんて意外だな、と僕は素直に感心した。

僕は通りかかったウェイターさんにリクエスト・リストを手渡す。

「この曲がきっかけなの」　せつちゃんは背筋をしゃんと伸ばして話し始めた・・・

そうして僕はせつちゃんの体験したマコさんとの邂逅を知ったのだ。始めにピアソラの曲を聴きながら眠りについた事を。

猫のエレーンが特殊な導きを見せ、フォネティックコードから導かれる暗号のパスコードは”dream of mako”であった事を。

そのパスコードによりマコさんの夢へとリンクされる事を。

せつちゃんが言うには、マコさんは元気であるらしい。

基本的には夢の中からは出てこれない。

しかし一日の数時間は病室での”現実世界”をちゃんと感じているらしい。

「マコの意識が目覚めている時、タロさんのラジオ番組が聞こえているんだって、マコは言ってたわ」

黒服が運んだ”イカ墨のパスタ”を頬張りながら、せつちゃんはそんな物語を教えてくれたのだった。

マコさんの意識が覚醒している？僕はその事にとっても驚く。
てつきり、ずっと眠っている状態なのだと思っていたのだ。

夢の中で会えると言つのも、僕にとっては大きな希望である。
僕は忘れないようにパスコードをメモした、導入曲も一緒に。

- - -

- 本日はご来店頂きまして、誠にありがとうございます。 -

店内に流れるアナウンス。

マイクを持って現れたのは、さっきの黒服ウェイターさんである。

- それでは、リクエスト曲をお届けします -

その言葉を合図に店内の照明がじりじりと暗くなり、壁がするりと
左右に開いた。

壁の向うにはチェロ・ピアノ・バイオリン・アコーディオンで構成
された本物の演奏者達が控えていた。

ムムキ (Mumuki) - Astor Piazzoll
a and Gidon Kremer -

生音の持つエネルギーに満ちた演奏に、店内のお客さんたち（もち
ろん僕達も）みんなが驚きと嬉しさで顔を綻ばせた。

- - -

食事を終えた僕とせっちゃんは、駅前で缶コーヒーを飲んでいた。

「タロさん、今日はどうもありがとう。楽しい食事と演奏だったわ」

一息でコーヒを飲み終わると、せつちゃんはそう言って僕を見上げた。

「あたしね」なぜかせつちゃんは小さな声でささやく。
ん？なあに？ と僕はせつちゃんに耳を寄せる。

その途端、せつちゃんは真っ赤な顔をぶんぶんと振った。

「マコに会えるといいね！」そう言って、せつちゃんは駅へと駆け出した。

「うん！どうもありがとうね！」改札を駆け抜けて行くせつちゃん
に向って僕は手を振り答えた。

・マコさん。君は良い親友に恵まれてるね。・

僕は夜空の星に向って小さく微笑んだ。

> i 1 5 2 3 4 — 1 7 6 7 <

23・タロの架け橋3 (後書き)

もうすぐ新章突入の予感。

ご感想、ご指摘、よろしくお願いします。
(名称などの細部は作者の創作です)

24・タロの架け橋4（エレーンとの再会）

せつちゃんを見送った僕は、局の駐車場に留めていた車で家に戻った。

玄関を閉めた僕は大きく深呼吸をする。

久しぶりに聴いた生演奏は僕の縮こまった心を少しずつ解きほぐしてくれたのだろう、

耳の奥では今でも拍手や楽器の鼓動が鳴り響いているようだった。

僕は部屋の窓辺に飾ってあったキャンドルに火を灯し、蛍光灯の灯りを消す。

窓の外では秋の虫がりんりと鳴いている。

シャワーで軽く汗を流した僕は、冷蔵庫でキンと冷えたビールをコップに注いだ。

ステレオセットの電源を入れて、ムムーキのCDをセットする。

（ボリウムを極力控えめに設定する）

ステレオのリモコンを枕元に置き、僕はビールをゆっくりと飲み干す。

窓の外に浮かんだ月

僕は月を見つめながらゆっくりと布団に横たわる。
天井にキャンドルの灯りが揺らめく。

CDの再生ボタンをそつと押す。

・・・眠りがゆっくりと視界を包んで行く・・・

『久しぶりだわね』 暗闇の向うから唐突に聞こえたのは、聞き覚えのある声。

暗闇の奥でカーテンのような闇の色彩がゆっくりと揺らめく。

「エレーンだね？」 僕は念のため、聞いてみる。

僕の言葉に呼応するかのように、ゆるゆると闇のカーテンが揺れやがて現れたのは、懐かしい猫の姿。

『元気そうね』 エレーンはひらりと僕の肩に飛び乗り、僕の耳をガジガジと噛んでこう言った。

『にぼし、持ってない？』

持ってないよ、と僕が言っていると彼女はあきらかにがっかりした様子でしつぽを力なくなたらしめた。

そんなに食べたいなら家に来ればいいのに、と僕はエレーンのふわふわとした体毛を撫でながら言ってみた。

『それもそうね』 彼女がそう言った瞬間、僕は眠りから目覚めた。

そのようにして僕はキャンドルの灯りに揺らめく部屋へと戻ったのだ。エレーンと共に。

『ところでタロさん・・・この曲、流行ってるの？』 エレーンがステレオセットに耳を向けて顔を傾げる。

やれやれ、と僕はため息をついて肩を落とした。

どうやらこの曲がマコさんに会える”鍵”ではなかったようなのだ。

エレーンと言う、さっちゃんがマコさんの待つ”夢”の世界に行けたのは”会えるべき時期”だったのだと。

「僕はまだ、マコさんと会えないの？」

僕の問いかけにエレーンはきっぱりと首を振った。

『あせらないの。そのうち会えるでしょ』

エレーンはそう言うと、僕がキッチンから持ってきた”徳用にぼし”を大事そうに頬張った。

キャンドルに照らされて部屋の壁にエレーンの影が映り込んでいる。

ピアソラのタンゴに合わせて左右に揺れるしっぽの影絵を眺めながら、僕はビールを飲み干した。（煮干をおかずにして）

なににせよ、と僕は思う。

エレーンが戻ってきたのは吉兆であると。

> i 1 6 3 1 2 — 1 7 6 7 <

24・タロの架け橋4（エレーンとの再会）（後書き）

次回から新章に入ります。

ご感想、ご指摘、よろしくお願いします。
（名称などの細部は作者の創作です）

25・刺客は海を渡る

「セアン・ハラルドソン。来日の目的は何ですか？」

航空のチェックインカウンターの窓越しに銀色のボールペンで指されて、セアンは少しムツとした。

「医療調査です。日本の技術は進んでいますからね」

セアンは愛想笑いを浮かべて日本語で答える。

”医療”と聞いた職員は途端に愛想笑いを満面に浮かべて、許可印をパスポートに押し付けた。

調査内容までは申告の必要がなさそうだと分かって、セアンは密かに安堵した。

- - -

海を渡る風が思いのほか心地よく、日本の空気を胸に吸い込んだセアンは思わず独り言をつぶやく。

「日本は良いな。空気まで優しい。セキュリティも甘い。気に入った」

やがて空港から街まで直通運行している高速バスに乗り込んだセアンは、座席から見える湾岸沿いの風景をぼんやりと眺めた。

良く整備された道路と程よく空調の効いたバスの乗り心地に、彼は満足して目を閉じた。

- セアン・ハラルドソン -

彼は某D国の軍事参謀側近である。

- - -

その頃、ナリタ会長の下に一本の電話が掛かっていた。

会長は自宅の小さな屋敷に設置された古めかしい黒電話を握り締め、彼の最も信頼する部下からの報告をじっと聞いていた。

偶然遊びに来ていたタロは、いつになく真剣な面持ちの会長を見て七輪で柔らかく炙っていたサンマを危うく焦がしそうになってしまった。

「会長、どうかなされたんですか？」 電話を切って腕を組んだ会長に、そつと尋ねてみる。

「困ったのう」 会長は小さな目を細めて鼻を鳴らした。

「マコさんの秘密、漏れてしまったらしいわい」

七輪の上で真っ黒になったサンマがぽんつと爆ぜた。タロの背中に冷たい汗がじつとりと流れる。

季節外れのトンボが屋敷の中をそつと通り過ぎて行った。

> i 2 3 2 4 9 — 1 7 6 7 <

25・刺客は海を渡る（後書き）

新章に入りました！

ご感想、ご指摘、よろしくお願いします。
（名称などの細部は作者の創作です）

26・幻想のセアン

”幻想のセアン” - 彼は同僚達から皮肉交じりにそう呼ばれていた。

(それは彼の切なる妄想に由来していた)

彼の生まれは、明らかにされていない”貴族”の出だと言つのが彼の推した説である。

しかし周囲の意見は納得のいかないものであつた。

橋の下で拾われ、孤児院で育てられたセアンを、周囲のみんなは”貧民に捨てられた子”だと思われているらしいのだ。

だからこそ孤児院の粗末な布団に潜り込む度に、セアンは「自分を正しく導くべき朗報」が訪れるものと信じて疑わなかったのだ。

そんなセアンを孤児院から救い出したのが、モルトケである。

やがてセアンは彼の義理の息子として、さらには彼の側近として育てられ地位も与えられた。

しかし、彼はモルトケ義父の事をほとんど何も知らなかった。

(それは仕方のない事だった。なぜなら彼は、自分のルーツすら辿れなかったのだから)

モルトケは某D国軍事施設のマンシヨンの一室を彼に分け与え、参謀秘書として学び成長する事を望んだ。

そしてセアンはそれを受け入れたのだ。

セアンはモルトケ義父を世界の中心として受け入れ、彼が望む何があるかを与える存在になりたいと、そんな風に思っ生きてきたのだ。

そんなセアンがモルトケに極秘任務で呼ばれたのは、夏の残暑が薄れ始めたある日の事だった。

セアンは参謀本部の地下施設から地上に上がるエレベーターの中で、先ほどの会話を思い返す。

「知つての通り、わが国の諜報機関では常時世界中の情報を傍受している。辺境の地の電話の内容ですらも聞き漏らすことはないだろう」

モルトケは地下施設に所狭しと並んだコンピュータ機器を操作しながらセアンに語る。

セアンは神妙な面持ちでモルトケの言葉に耳を傾ける。（余計な相槌などでモルトケの心象を損なう事を彼は恐れていた）

「そこで、この会話を拾うことができたのだ」

モルトケが指し示すファイルをクリックすると、盗聴された室内の映像が再生された。

- - -

- 「まだ世界中に内緒なんですわ」

そう話すのは日本のヤクザだろうか、いかにもジャパニーズマフィアの”ドン”という感じだ。（セアンは主要な国の言葉を聞き取る訓練を受けていた）

- 「マコさんの”眠り病”は、極めて特異な例のようですね」
こつちもマフィアの幹部のようだ。タジマとは本名だろうか。

- 「通常、マコさんのように長期間眠り続けるのは”植物”状態と言われます」 マコと言つのが秘密を握っているだろうとモルトケは睨んでいると言う。

- 「実はこの症例に、各国の軍部が興味を示しています」 この

言葉を聞いて、セアンは思わずモルトケを見やった。彼らは盗聴に気付いているのだろうか。

- 「タロさん、奴らは本気ですぞ。何年も眠らせる病気、これがどれほど利用価値があるかを想像できますかな？」

- 「うーん・・・都合よく邪魔なフィクサー（影の権力者）を何年も眠らせる材料になる、とか？」 間違いない、とセアンは確信する。奴らは盗聴に気付いているのだ。

- - -

「セアン・ハラルドソン、本日よりお前に現地諜報活動の任を命ずる。行き先は、”日本”だ」

モルトケの良く通る威厳に満ちた声に、セアンは立ち上がり背筋を伸ばした。

セアンの示した沈黙の合意を認めると、モルトケは大きく頷いた。

”眠り病”を解明できれば、とモルトケは思う。

その効果を利用できれば、我々の立ち位置も有利なものとなるだろう。

一礼して退室して行く義理の息子を見つめながら、彼は希望に胸を膨らませた。

> i 1 3 7 6 6 — 1 7 6 7 <

26・幻想のセアン（後書き）

少し物語りの色合いが変化しました。

なかなか進まなくて申し訳ない！

決して他の小説にうつつを抜かしているわけでは・・・ないとは言えない（笑）

応援してくだされば喜びます！！

27・タロの決意と旅の始まり

僕達はN・A・事務局の会議室Aでひっそりと話し合っていた。
(エア・コンディショナーのゆるいモーター音が頭上から微かに聞こえていた)

「彼らはマコさんの”眠り病”に興味を示しているらしいですな」
ナリタ会長の屋敷が秘密裏に盗聴対象とされていた事はマコさんにとって大きなリスクだと、会長は危惧していた。

だから、会長ははっきりと断言したのだ。

N・A・グループが長年封印してきた”裏の顔”を再び始動すべき時が来たのだと。

会長の下に朗報が届けられたのは数日後の事だった。

『全国の諜報活動を我々が補いたい』 -

今まで敵対してきた全国の”裏稼業”を牛耳る大物達から全面的な協力の意が表明されたのである。

(それはもちろん危険な賭けだった。しかしいずれは決断すべき事だったと会長は語った)

そのようにしてスパイ活動を仕掛けた相手達の全てを調べ尽くしたと言う。

会長宅の諜報機器を足掛かりとして、特定の周波数で傍受される機材の場所や携帯している人物などが洗い出されたのだ。

-
-
-

”TOP - SECRET (N・A・Reports)”

会議室のスクリーンに調査結果が続々と映し出される。

（裏組織の協力により集められたそのレポートは、わずか一週間足らずで解析を終えていた。ああ恐ろしい）

会長宅を盗聴していた相手。それは某D国・軍事施設であるらしい。

”D国” - 有史以前から人類が存在したとされる土地。
国連の非常任理事国も担当するEUの一員。

平和維持活動にも協力するD国は総兵力の少なさにも関わらず兵士のスペックは非常に高いと言う。

またその反面、アンデルセン童話の産みの国という一面も兼ねている。

世界有数の先進国。

そしてどうやら、その一国の軍事部門は世界的な諜報活動を展開しているらしいのだ。（秘密裏に、しかし大胆に）

「ほんの一步を間違えれば・・・国家間の紛争を引き起こすリスクを孕はらんでおるのです」

会長とタジマの真剣な面持ちに、僕は自分達の置かれた立場を改めて認識する事となった。

「おそらく数日の後に」 とタジマは言葉を引き継いだ。

「D国の諜報部員がタロさんに何らかの接触を試みるでしょう。なぜなら既に日本国内へ潜入した形跡を我々は把握したからです」

その時のために、とタジマは前置きをしてテーブルに置いていたテレビのリモコンを操作する。

リモコンに誘導され会議室の壁に降りてきたスクリーンに投影された映像を見て、タロは固まっていた。

「この映像は」 とタジマの説明は続いた。

「彼らの通信履歴から割り出した”盗聴や盗撮”の足跡を辿ったのが、これらの映像です」

スクリーンに映し出された幾つもの映像たちは、僕が日常を過ごすであろう場所ばかりだった。

その時、僕には聴こえた気がしたのだ。

マコさんの想いが。（声にならない願いのような）

僕は決心した。

「できるかどうか分かりませんが」

僕の言葉に、会長とタジマが振り向く。

「逢いに行ってみます。マコさんの夢に。・・・うまく言えないのですけど」

その言葉に、会長とタジマは満足げに頷いた。

それが僕の旅の始まりとなった。

> i 1 3 8 1 7 — 1 7 6 7 <

27 タロの決意と旅の始まり (後書き)

ご感想、ご指摘、よろしくお願いします。

(名称などの細部は作者の創作です)

28・タジマからの贈り物

僕のアパートに小さな盗聴器が仕掛けられている。

盗聴の様子は遠いD国軍事施設の地下深くで常に解析されている。

アイドリングの音さえ聞こえない黒塗りのベンツの車内で、タジマが僕に教えてくれたのだ。（僕のマンション前までタジマは送ってくれたのだ）

「彼等が解析した情報を、我々が常に監視し続けています。D国はそれに気がついてはいません。少なくとも彼らのモニタリング能力は我々の数歩後ろを歩んでいるのです」

日本の情報技術レベルは公にされている額面通りのスペックではないのだと、タジマは言うのだ。

それが公的機関とヤクザの決定的な差なのだと。（さらにその上の情報技術にN・Aは辿り着いていたのだ）

- - -

「彼等が何らかの動きを見せるとき、タロさんの携帯電話へメール情報を通知します。タロさんからもわたしや会長へメールで連絡してください。」

そう言つてタジマが差し出したのは、一台の携帯電話だった。

黒地の地味な携帯電話。

それは一般回線で直接繋がることはなく、N・A独自の通信回線と専用のプロトコルを介する仕様となっているのだと言う。

N・A側のサーバでプロトコル変換を行う事で一般回線も利用できる仕組みであり、N・Aとの通信内容は傍受解析が不可能なのだと説明してくれた。（ば、僕には理解できないけど）

- - -

「おそらく今日か明日には”D”から接触があるでしょう」（相手国のスパイ要員をタジマは”D”と呼んだ）
タジマはそう言つと、黒光りするベンツと共に外灯の向うへと消えていった。

タジマが与えてくれた携帯電話の電源を入れると、一件のメールが通知された。

そこには、”D”に関する情報が完結にまとめられていた。（タジマは実に仕事が早いのだ）

外灯の下で一匹の蛾がひらひらと踊るのをぼんやりと眺めつつ、僕は大きく背伸びとあくびをした。

あくびを噛み殺したままマンションの階段を登る僕の目の前に、ひよっこりとエレーンが現れた。

「タロちゃん、準備をするわよ」

さつき外灯で飛んでいたであろう蛾を弄びながら、彼女はきっぱりとそう言ったのだ。

準備つて？と僕が聞くと、エレーンは首を竦めてしつぽを立てた。
「決まってるでしょ？旅に出るのよ。」そう言つとエレーンは再び蛾を弄んだ。

生まれ変わっても、と僕は思う。

蛾にはなりたくないな。

> i 1 4 9 4 4
— 1 7 6 7
<

28 タジマからの贈り物（後書き）

ご感想、ご指摘、よろしくお願いします。
（名称などの細部は作者の創作です）

29・接触 - セアン -

「セアン様」

会員証と共に一枚の規約書を指し示したのはレンタルビデオ店の店員だった。

「会員規約にご理解頂けましたら、こちらとこちらにご署名をお願い致します」

他国の規約書にサインをするなどモルトケ叔父に知れたら大変なんだがな、とセアンは思ったがこれもまた仕事なのだと自分に言い聞かせた。

なぜなら、ターゲットはこの店を頻繁に利用しているようだからである。

流暢にサインを記入し会員証を受け取ったセアンは、店内をゆくりと確認して周った。

（他国の文化が詰まったこの”ビデオ”の群れはセアンにとって宝の山のようなものである）

- - -

『名作』とプラカードの掲げられたコーナーで思わず彼は足を留める。

「ハムレット（Hamlet）」を手に取り、セアンはうつとりとため息をつく。

「To be or not to be, that is the question（生きるべきか死ぬべきか）」 実にいい、

とセアンは目を瞑った。

ウィリアム・シェイクスピアの悲劇を物語る舞台を、セアンは崇拜していた。

- デンマークを治める父王の死後、叔父である新王とすぐさま再婚した母のことを嘆く王子ハムレット。
クロードディアス

- 父王の亡霊が現れ、自分の死は新王の陰謀（クローディアスによる毒殺）だと告げ、ハムレットに復讐を迫る・・・
ふくしゅう

（セアンは、ハムレットを自身に投影し続けていたのだ）
彼を良く知る旧友達はみな、セアンを”ハムレット症候群”と揶揄していた（作者の造語です）

やがて彼は「ゴッドファーザー（The Godfather）」
を手にとった。

- アメリカの作家、マリオ・プーゾが、1969年に発表した小説。それを原作とした映画が1972年に公開された。

- イタリアンマフィアの血塗られた歴史と哀愁を描いた名作。
これこそ本物だ、とセアンは頷く。

そうして、本当になんとなく、セアンは奥まった（黒いカーテンの向こうの）コーナーへと足を踏み入れたのである。

『ADULT』とプラカードの掲げられたその一角は、セアンの理性を一瞬にして喪失させるに十分であった。

赤いビロードの布地に堂々と鎮座したビデオの群れに、そのパッケージの表現力に、セアンはすっかり魅了されてしまった。

耳まで真っ赤に染まって立ちすくむセアンを、他の客達が訝しげに避けていた。

いわゆる、えっちビデオである。（しかし彼には免疫がなかった）

「な、なんなのかなこれは」 深呼吸をしたセアンは魅惑的な陳列棚に向って歩み寄った。

素肌をあらわにした女性がたくさん並んだ一つのパッケージ（まるで女王のようないでたちの女性がハレンチな格好で挑発している）に、恐る恐る手を伸ばしたセアン。

その瞬間、横から忍び寄った男性客がそのビデオを奪い去って行く。

「なんてことだ」 彼はようやく理解したのだ。

日本人はあらゆる局面において理性的であり、礼儀正しい。
しかし、えっちが絡めばその限りではないらしい。

「ここは戦場のようだ」 セアンは彼らの流儀に従い、ヒソソと物色し忍び足でターゲットを奪取したのである。

- - -

セアンがADULTコーナーで人知れず（仕方なく）物色しているその時である。

「真田幸一様、ご返却ですね」 ビデオ店の受付からそんな呼び声が聞こえてきた。

それを聞いたセアンは慌てて抱えていたパッケージを放り出し、受付を伺う。

黒いビロードのカーテンをそつと捲ると、受付から立ち去る大柄な

男の後姿が認められた。

その男が自動ドアの向こうに消える瞬間、セアンは音もなく受付を横切り自動ドアをすり抜けようと駆け寄った。

その時だ。

ぴよんぴよんぴよんと電子音が鳴り響き、店内のスタッフが駆け寄って来た。

小太りの男性スタッフがおもむろにセアンの前に立ちふさがる。
（こいつ、政府の人間か？） セアンの脳裏に緊急対処手順が浮かび上がる。

しかしスタッフ達の言葉は意外なものであった。

「お客様。商品を店外に持ち出すのは禁止されているんです」

セアンは説明を受けてようやく理解した。

彼がADULTビデオ（『えっちな外人スペシャル』）を手に持ったまま、出入り口に設置されたセキュリティゲートを通り抜けたために盗難防止アラームが鳴り響いたらしい事を。

- - -

そうしてセアンは認識を改めたのだ。

「日本のセキュリティは、国家よりも一般庶民の方がより高度に守られているようだ」と。

29・接触 - セアン - (後書き)

ご感想、ご指摘、よろしくお願いします。
(名称などの細部は作者の創作です)

30・追跡 - セアン -

レンタルビデオ店から戻った僕は、部屋の電気を薄明かりにして窓の外を伺った。

（道路の向うに佇む人影がそつと電柱の影に隠れるのを僕は見逃さなかった）

『あれはなんなの？』 エレーンが直接僕の頭の中で問いかける。
（”奇跡の猫” エレーンは心中でも会話が可能だった）

『あれは・・・たぶんスパイだ』僕はエレーンに答えた。（心の中で）

暗がりで見るとそのスパイは、僕にはあまり悪い人物とは思えなかった。

タジマから譲り受けた黒地の地味な携帯電話が震えたのはその時である。

音もなく震える携帯電話を開いて、メールを確認する。

- ”タジマです。お気づきかと思いますが、先ほどからあなたを尾行している人物がいます。その男が先ほど話したD国諜報部員・セアンハラルドソンです。” -

- - -

僕とエレーンは、たくさんのおみやげを大きなリュックに詰め終えたところだった。奇跡の待つ猫森村へと向うために。

『さあ、行きましようか。と言いたいところだけれど』

エレーンは僕を振り返ってつぶやいた。
『さっきのスパイクくんが覗いているわ』

僕は迷った。（玄関脇のキッチンの窓辺からちらちらと人影が見え隠れしている）

おそらく僕らがここから去った後、スパイクくんはこの部屋を色々と調べるのだろっ。

そしてマコさんの病室を突き止めて・・・彼女を放っておいてはくれないのだろっ。

そのくらいの事は僕にも容易に想像できたのだ。

『タロちゃん、景気付けに一曲かけましょうよ』

エレーンが唐突にそんな事を言う。

僕はそつと頷いた。

- あなたにいてほしい (Now You're Not Here)

- Swing Out Sister -

甘美な曲調が哀愁をもって部屋に満ちる。

窓の外で息を潜めていたスパイクくんの気配が、緊張から緩和へと変化するのを感じる。

（不思議な事に、僕には彼の気配と共に心の様を感じ取れたのだ）

『タロちゃんあなたは目覚めつつあるわ。いい兆候だわ』

エレーンは満足そうに僕の肩に飛び乗り、耳の辺りをくんくんと嗅いだ後でそうつぶやいた。

（僕は気がついていたら、僕の瞳が熱を帯び始め、不思議な色彩に満たされていくのを）

僕は気配を消してそつと玄関に忍び寄る。

!!

鍵のかかっているドアを勢い良く開けたはずみでスパイクくんが玄関に転がり込んだのと、僕が彼を背後から押さえ込んだのはほぼ同時であつた。

目を見開いて状況を見極めようとものがくスパイクくん。

エレーンは即ち飛びついて彼の耳の匂いをくんくんと嗅いでいた。

『こいつ、危険よ』 エレーンの瞳がずっとすばまった。

『だけど・・・純粹だわ』 とまどつたようにエレーンは僕を見上げた。

どうしたものかな、と僕はつぶやく。

腕の間接を身動きできないように決められたスパイクくんは、身体中の力を既に抜いてぐったりとしていた。

遠くでパトカーのサイレンが聞こえていた。ウーウーと鳴っていた。

> i 3 0 7 6 2 — 1 7 6 7 <

31・捕虜 - セアン -

パトカーのサイレンは次第に近づいて来ているようだった。

蛍光灯に照らされ力なくうなだれる異国のスパイくんが口を開く。

「今の技は何だ？空手か？」蒼い目の青年が流暢な日本語を話した事に僕とエレーンは少し戸惑った。

「日本語が話せるの？」と僕は聞いてみた。

「あの技、とても興味がある。教えて欲しい」スパイくんが真剣なまなざしで僕を見上げる。

僕の背後に目を移した彼が目を見開いて震え始めたのはその時だ。

スパイくんの視線を辿り背後を振り向いた僕が見たのは、窓に映るたくさんの人影だった。

”聞こえるかセアン！お前は既に包囲されている！無駄な抵抗をやめて部屋から出て来い！！”

拡声器で叫ぶ声がマンションに響き渡る。

パトカーの警告色がちかちかと部屋を照らし、さらに強い光が窓から射し込む。（部屋はまるで真昼のようだ）

セアンと呼ばれたスパイくんが咄嗟にポケットから取り出した携帯電話に向って叫んだ。

- Fox trot - Alfa - India - Lima - Echo -
Delta!

（フォックストロット・アルファ・インディア・リマ・エコー・デルタ！）

それを合図としたかのように、玄関から窓からたくさん警官が部屋になだれ込んで来た。

僕の小さな部屋は、あきらかな定員オーバーで今にも床が抜けそうだった。

「今のは暗号ね」 エレーンが僕の肩越しにつぶやいた。

「ね、ネコが？　しゃっ、しゃべるのか？」　啞然とした顔でセアンがエレーンを振り向く。

「フォネテックコードね。」 Failed ”（失敗した）でしょ」
エレーンの指摘にセアンはがつくりとうなだれる。

奇跡の猫は得意げに胸を反らせて毛づくろいを始めた。

- - -

100人を超える警官に囲まれたセアンが抵抗する様子もなくマンションを後にしたのは、警官が突入してわずかに5分後であった。マンションの住人が遠巻きにその様子を見守る中、僕は重要参考人として一緒に連行されることとなった。

警官達に促された僕が乗り込んだのは、10台のパトカーに挟まれた黒塗りのベンツだった。

やけに巨大な車体のベンツが音もなく走り始める。

やがて僕は妙な気配に気がつく。

車のシートを隔てるシールドの向こうから誰かがじっとこちらを伺っているのだ。

顔を近づけて覗き込んだその時、微かなモーター音と共にシールドが開いた。

「がははは、タロさん。驚かせてすまんね」 シールドの向こうから顔を覗かせたのは、会長だった。

「会長も捕まったの？」 僕がそう問いかけると、会長はいたずらっぽく首を振る。

音もなく走るベンツの車内に、会長の朗らかな笑い声が響いていた。

> i 1 1 2 5 9 7 — 1 7 6 7 <

32・決別 - モルトケ叔父 -

その凶報が軍事参謀本部に届いた瞬間、私はセアンの存在を消去しなければならなかった。

・・・何故ならば、日本警察の手にセアンが落ちたからだ。

この薄暗い地下施設でその夜、わたしは息子を失ったのだ。

盗聴記録から、セアンの行動は逐一わたしの元へ報告され続けていた。

セアンはいつでも盲目的な程にわたしの指令に従ってきた。

理由さえ知らされないままにこの穴を掘れと言われれば、彼は爪を剥がしてでも掘り続けたものだった。

あの国の言葉を話せるようにしろと言っただけで、セアンは二ヶ月後にも叶えて見せたものだ。

しかしあの子はいささか妄信的でありすぎたのかも知れない。

”ハムレット症候群”である事に無自覚であり過ぎたのかも知れない。

だからこそ、わたしは「モルトケ叔父」として必要以上の情報を与えなかったのだ。

（彼は自分を構成すべき背景を幻影としてしか捉えられなかったのだろう）

こんな日がいつか来るだろう事。

わたしはおぼろげながら予知していたのだ。

許せよセアン。(我が息子よ)

- 叔父は今日から一切の縁故を消去する -

そのようにして、密やかに”D国”の関係した痕跡が消し去られるに至ったのだらうと、セアンは語ったのだ。

(N・A・Reports 「セアン尋問調書」より)

> i 1 3 4 9 7 — 1 7 6 7 <

33・報告会　＼N・A・Reports　「セアン尋問調書」＼

その日、”セアン捕獲”の報を受けた全国の組関係者達がN・A・事務局に集結していた。

大きな会場に所狭しとひしめき合う各組の関係者達。
（受付で並ぶ組員達は所持品チェックを受けている）

会場の照明が暗くなったところで、僕はステージに上がった。

「ご来場の御歴々の皆様、本日はご足労頂き誠にありがとうございます。
ざいます。

私、司会を努めさせていただきますタロと申します。
至らぬところもあるかと存じますが何卒宜しくお願い致します」

頭を下げた僕に、会場からパラパラと拍手が鳴る。

僕の挨拶に続いて、タジマがスクリーン横の幕間から姿を現した。
（僕はステージ横の卓上ミキサーから操作し、タジマにスポットライトを集めた）

「N・A・事務局のタジマでございます。お初にお目にかかる方も、しばらくぶりにお目にかかる方も、どちら様も平によりしくお願い申し上げます」

タジマの丁寧な口上を受けて、会場から大きな拍手が鳴り響く。
タジマちゃん元気かい？と声が掛かると会場の一角で笑い声が上がった。

まいったな、とタジマは頬をぱりぱりと掻く。（全国の組長達にかかるとタジマも肩身が狭いらしい）

「それでは、今回の”報告会”を始めるに当たって、ナリタ会長からご挨拶がございます」

幕間からゆつくりと登場したナリタ会長にスポットライトが移動する。

「や、皆さん。ずいぶんと懐かしい顔が並んでおるようですね」
会長が大きく片手を振った瞬間、会場の全ての人々は立ち上がり、頭を下げた。

（それは、会長との力関係がはつきりと示された瞬間であった）

そして・・・某”D”国スパイの報告会が始まった。

- - -

会場の舞台に設置された巨大スクリーンが明るく輝いた。

- N・A・R e p o r t s -

パソコンと連動したタイトル文字が浮かび上がるのを確認し、僕はマイクを手を取った。

「セアン尋問調書」

警察を装ったタジマたちと共に、日本中から集まった協力部隊（名だたる組の代表達とその利き腕たち）はタロの部屋に集まり、

某”D”国スパイのセアンを捕獲した。

その報せは彼ら”D”国の仕掛けた盗聴機器によって遠い”D国”軍事参謀本部へとリアルタイムに伝わった。（彼らは自らの策に溺れてしまったのだ）

日本の警察機関が絡んだと聞いて、セアンの義父（モルトケ叔父）は当案件を無かった事案として切り捨てた。セアンハラルドソンはこの瞬間から存在を否定されたものと推測される。

（N・A・率いる協力部隊の諜報結果によれば、”D”国の記録からセアンの存在そのものが抹消された事が判明した。さらに”D国”軍事施設からの遠隔操作によりセアンの電子機器は全てのデータが消去されていた。）

セアンの回想によれば「もしもの場合には、私達は一切の縁故を切らなければならない」とモルトケ叔父は言っていたらしい。

（尋問担当役・タロ（N・A・） 記載より）

「以上が尋問から得られた事実です」 僕はスクリーンの照明をOFFにしてマイクを会長に譲った。

静まりかえった会場に、張り詰めた緊張感が密やかに満ちていた。（みな驚いていたのだ）

僕は用意していたローソクに火を灯す。

暗闇に満ちた会場の空気がゆったりと変化する。

緊張が少しずつほぐれる。（あちこちからため息が零れた）

ローソクの灯りが仄かに揺らぎ始めた。

> i 1 7 9 9 5 — 1 7 6 7 <

33・報告会　↳ N・A・Reports　「セアン尋問調書」　↳（後書き）

遅筆で申し訳ない！

ご感想、ご指摘、よろしくお願いします。

（名称などの細部は作者の創作です）

34・報告会2

会場の全員が会長の言葉を待っていた。

「わたしたちは・・・」 会長の言葉に、会場へ静寂が波のように広がる。

「わたしたちは、ヤクザと言う”粹”にこだわりすぎていました。それを近年、憂慮しておったわけです。

仁義にこだわり、恐怖で支配し、その先に何を求めたのか？

今、時代は明らかに変わりつつあります。あなた達にもこの機会にご理解頂きたい」

会長は一呼吸置いて会場をぐるりと仰ぎ見た。異を唱える者が現れない事を確認し、言葉を続けた。

「・・・わたしは思うです。

今のわたしたちに欠けていた”その先”、その答えを・・・わたしはタロさんから学ぼうと思っておるのです」

（会長の言葉を合図に僕は曲を流した）

- 防人の詩 - （さだまさし）

『・・・大切な人も故郷も自然もないがしろにしていますか』と問いかけるその歌は、

かつての大英帝国が寄るべく先もなく戦い散った時代を想い起こさせるような悲しい歌だ。

しかし同時に命の温もりを確かに感じさせてくれていた。

（会場の筋者達の表情に明らかな変化が現れていた）

「タロさんは私達 N・A の『導く者』であります。彼はひたすらに純粹で暖かです。と同時に、模索し続けて生きる者です。」

「実を申しますとわたしはナリタ組がヤクザから”N・A.”へと転換すべく尽力した背景には、『ミルグラム実験の教訓を正しい方向に導く』という目的がありましたです。」

（ 前作「タロと今夜も眠らない番組」33話より ）

あの実験からわたしが学んだ事、それは恐怖で支配した先に待ち受ける世界が地獄であるという事実ですわい。

第二次世界大戦のホロコースト、わたしは今でもそれを憂慮しておるのです。

恐怖は恐怖しか生まない。ではそれを教訓として何を目指すのか。

タロさんが教えてくれたのは・・・『愛』でした。

わたしらの心には『愛』と『憎しみ』という相反した原点があるわけです。

愛も憎しみも『力』の発生源と考えられるわけですね。

組織立つて方向を指し示す時、個人のモラルは無意識に抑圧されてしまうのです。

問題は・・・目指した先に立った時、自分達が本来あるべき姿と現実の姿との乖離があるか否か。

その時正しくあるべき姿であったなら、そこからやる気が産まれる。組織はさらなる高みを望めるわけです。

間違った姿であったなら、個人のレベルでやる気が損なわれ組織は失速するでしょう。

そんな事にわたしは気がついておったわけですが、果たして『正し

い方向』とは誰が気がつき指し示す事ができるのか、これが最後の課題でした。

その答えを覚えてくれたのが、タロさんでした。

彼はわたしの甥っ子を・・・教える道のなかった甥を、正しい方向に導いてくれた功労者です。

そのタロさんを、今度はセアンが全面的に頼ると言っておるです。尋問を通じ、タロさんを全面的に信頼したそうです。

どうでしょうな、皆さん。タロさんに我等の未来を任せてみてはどうでしょうな」

会長が語り終わり、会場はしばらくの間静寂に包まれていた。
(僕は会場の明かりをONにして少しずつ明るさを上げた)

会場の一角から一人の小柄な老人がゆっくりと立ち上がり、真っ黒なサングラスを震える手で外すとおもむろに拍手を始めた。
それは合図だった。

広域暴力団の中でも総元締めと名高い老師が”N・A・”を承認した瞬間だった。
気がつくと会場全体に拍手の渦が鳴り響き、祝福の歓声が舞っていた。

「あんたがタロちゃんやな、ナリタさんの事まかせたで」

そう声を掛けられて顔を上げた僕の目の前で、先ほどの老師がしわだらけの大きな手を差し出していた。

僕はあわてて立ち上がり、老師の手を両手で握り、何度も頭を下げてお礼を繰り返した。

「ナリタさんから聞いたで。タロちゃんの Pasta はごっついうまいちゅうてな」

今度ごちそうしてえな、と笑って老師は再び背中を向けて屈強な付

き人に囲まれた。

老人から感じる圧倒的な威圧感に、僕はひたすら立ちすくんで見送った。

- - -

帰り道、僕は再び巨大なベンツに乗りこんでいた。

「驚きましたね」 運転席からタジマがバックミラー越しに話しかける。

「こ、怖かった」 と答えた僕を見て、タジマは朗らかに笑いだした。

「あなたのそういうところが好きなんです」 なんだか嬉しそうにタジマは言う。
もちろん人として、と付け足されて僕は胸を撫で下ろす。（ホモなのかと思ったのだ）

家ではエレーンがお腹を空かせて待っているだろう。
僕は車窓を流れる街を眺めながら献立に想いを巡らせた。

これからもつと驚く事になるのだが、それはまた次のお話である。

> i 1 4 5 2 1 — 1 7 6 7 <

35・新しい生活・セアン

僕とエレインの旅立ちはしばらくお預けされる事になった。

それはなぜか？セアンが望んだからだ。

この奇妙でハンサムな蒼い目の青年はなぜか僕から離れようとはしなかったのだ。

セアンの住居はタジマが用意してくれた。（僕の隣の部屋に！）

まあ、身寄りもない上に日本の事情にも疎い事を考えれば仕方のない事ではある。

しかし、僕にもプライベートくらいはあるのだ。

なぜに個人的なレンタルビデオの趣味まで詮索されなくちゃならないのか。

それについて僕はタジマに携帯メールで抗議を試みたのだが：「それだけ慕われているんでしょう。師匠として」などと返された。

そうなのだ。

セアンは勝手に僕を『師匠』と呼ぶのだ。

- - -

良く晴れたある朝、僕はベランダのガラスサッシを大きく開く。

空には雲ひとつなく、落葉し終わった街路樹に冷たい風が吹き付けていた。

（空気はきりっとして本格的な冬の到来を告げていた）

猫のエレーンは大きく伸びをすると僕の脇をすり抜けてベランダの手摺りに飛び乗った。

「Good - Moooooonin'!!! My Master!
r! (おはよう師匠)」

大きな声で隣のベランダからこちらに叫ぶ外人。

Hey! と大げさな身振りで挨拶をされてエレーンはシャーツと威嚇した。

「朝からうるさいわね」そっけなくヒゲを震わせて彼女はベランダから部屋に飛んで入る。

「おおお、やはり夢ではなかったですね。エレーンさんは話ができるんですね!」
流暢な日本語で切り返すセアンに僕は「おはようさん」と片手を振った。

「ごはんは食べたのか?」と僕が聞くと、セアンはびつくりしたような顔を見せた。
ぷるぷると震えだしたセアンは次の瞬間にはベランダから引っ込んだ。

(日本語が伝わらなかったのかなと僕は首を捻った)
数秒の後、チャイムが鳴ったドアを開くと、セアンが部屋に飛び込んできた。

セアンの手にはお箸が握られていた。

僕はエレーンと顔を見合わせると、にっこりと笑った。(お箸が使えるなんてね)

朝食は釜で炊いた白いごはん焼き鮭とわかめの味噌汁と梅干だ。

「いただきまーす！」

セアンは臆せず僕達と共に食事を楽しんだ。

「おいしいです」と繰り返す彼に、「美味しい」と言うのだと説明する。

（それにつけても、梅干を食べた瞬間のセアンの顔は見ものだった！）

2005年の12月はそのようにして始まったのだ。

> i 3 3 8 3 8 — 1 7 6 7 <

36・覚醒

朝食を食べ終えた僕達は、ベランダから射し込む陽光の下で日向ぼっこをしていた。

セアンはさつきから驚いた顔で口をあぐりと開け放したまま固まっている。

と言うのも、窓の向こうには電線に止まったスズメたちが3羽仲良く並んで留まっており、
エレーンが”うな”とか”んなごゝ”とか鳴く度にスズメ達は少しずつこちらに近づいて来るのを見たからなのだ。

「し、師匠!? エ、エレーンは・・・魔法が使えるのかに?」

びつくりしすぎておかしいな日本語になっているが、気にせず僕は頷いた。

「ねえセアン。君の住んでいた国ではそんな不思議な話はなかったの?」

「Uum・・・少なくとも猫がしゃべったり『鳥寄せ』をしたなんて聞いた事はないけど・・・」ぶんぶんと首を振ったセアンは「そういえば」と何事が想いを巡らした。

「僕の国ではアンデルセン童話が近いね、まあファンタジーだけど・・・あとは”北欧神話”(Nordisk mytologi)かな」

『北欧神話?』スズメを間近まで引き寄せていたエレーンの目がギラリと光り、セアンの言葉に反応した。

エレーンはじいっとセアンの顔を見つめると次の瞬間、音もなくセアンの右肩に飛び乗りしきりに耳の匂いをくんと嗅いでまわった。

そしてセアンの耳をがしがしと噛むと『タロちゃん、この子合格!』彼女は振り向いて僕にそう告げたのだ。

僕はこういう時のエレーンを直感的に信じていた。だからセアンにも心を開く事に決めたのだ。そうして全てが始まった。

「セアン・ハラルドソン」僕は彼の瞳を真っ直ぐに見つめて語りかけた。

僕の瞳が熱を帯び、部屋の温度が急に上がり始めたようだった。セアンは熱に浮かされたようにぼんやりとした目で僕を見返してつぶやいた。

「師匠の瞳が・・・うう・・・これは何です?・・・たくさんの色が廻ってる・・・宇宙?・・・ああ、何が起こってるんです?・・・師匠!」

- 僕は力を解き放した -

僕には既に分かっていたのだ。僕の中に生きる”鷹”の力を。

ベランダのガラスサッシ越しに不思議な光景が浮かんでいた。まるで宇宙空間のように。(遠くでチェロの音が聞こえ始めた)

僕は意識の奥底から問いかけた。

《セアン・ハラルドソン。君の全てをここに示しなさい。そして僕を裏切らない事を示しなさい》

セアンの意識が答えたのは、しばらくの静寂を経た後だった。

- - -

全ての問答が終了し、僕は意識のリンクを閉じた。（それは時間にして一瞬の出来事だったと思う）

部屋の中に満ちていた熱がゆっくりと引くと、セアンは意識を失った。

『タロちゃんが目覚めたわ！ステキ！！』 エレーンは喜びの歓声を上げて僕の胸に飛び込んだ。

「待たせてごめんね」僕はエレーンを抱きしめた。

ベランダから外を見渡すと、澄み切った青空にスズメがゆっくりと飛び交っていた。

> i 1 3 9 0 5 — 1 7 6 7 <

37・新しい仲間

意識のリンクを通じて、僕はセアンの全てを理解した。
(同時にセアンも僕を理解した事を感じていた)

セアンが意識の向こうで語った”北欧神話”、それは僕達の目指すべき異なる世界のヒントを指し示していたのだと思えた。

それは次のような話である。

北欧神話(ほくおうしんわ - Nordic mythology)

それは”ゲルマン神話”で語られる”宇宙論”に包括されていた。

ゲルマン神話とは、キリスト教化以前の宗教で、北ゲルマン民族によつて共有されていた信仰や物語が集約された古ノルド語による書物(『エッダ』(スノッリ・ストウルルソン著)など)を示すと言われる。

ここで語られる”宇宙論”は興味深いものだった。

”この世に九つの世界が存在し、世界樹”ユグドラシル”によりリンクしている”との説を持つのだ。 [wiki参考](#)

それらをセアンから読み解いて僕は思ったのだ。

彼らの神話が指し示すように、複数の次元に異なる世界が存在しているのならば、マコさんの囚われた夢の世界もまた現実となりえるのではないのだろうか？

だから僕は”鷹”に問うたのだ。

・マコさんの魂はどこだ・

しばらくの沈黙の後、意識のリンクを経て僕は知ったのだ。これから僕らの向うべき道を。次元を超えた冒険を。

（セアンはそれを共有した瞬間に気絶した）

全てはセアンが目覚めてからである。

僕の新しい『仲間』は今、すやすやと眠っているのだ。

> i 3 0 7 6 2 — 1 7 6 7 <

38・猫森村へ

目覚めたセアン。

彼はひたすらに申し訳なかったと頭をさげた。

”眠り病”を軍事利用しようと考えた自分を詫びた。

彼も解ってくれたのだ、マコさんの症例、これは病気ではないと。現代医療で利用できるような代物ではないと。

同時に彼は「これも運命だ」と感じていた。僕らを助けたいと願ったのだ。

（僕はそれを嬉しく思い、エレーンも賛成してくれた）

そうして僕とエレーンは、セアンと共にあの森へ向う事となった。

- - -

猫森村への次元の穴。

エレーンの言葉（”んがっ”）に導かれて開かれた空中の大きな渦の中心に、その入り口は開かれた。

寂れたマンションの一室に突然現れたその光景は、セアンを驚かせるのに十分だった。

その瞬間からセアンは内股で地団駄を踏んでいた。（少し漏らしたのかもしれない）

僕は用意していた荷物とセアンを抱えて、次元の穴へと飛び込んだ。

『”にぼし”は持ったわね!』 エレーンが叫びながら着いて来たのが視界の端に見えたが、次の瞬間にはごうごうと鳴り響く音にかき消されて何も聞こえなくなる。

巨大な水流を抜けている・・・ように感じ

自分の鼓動がぼわぼわと水中に響き渡る

・・・大きな看板（古いレトルトカレーの）や、トラックの屋根や、高架橋の裏側が水の上からゆらゆらと浮かぶ。
やがて水路は暗渠あんきょへと吸い込まれて行く・・・

見たことのない風景が遠く・・・近く・・・霞んでは消え、・・・
暗闇に包まれる。

僕は次第に眠りかけていた。

それは非常に心地よい空間に思えたのだ。

『眠るな』 その声が聞こえるまでは。

> i 1 6 3 8 8 — 1 7 6 7 <

39・猫森村へ2

『眠るな幸一』

地の底から響くその声に、僕は思わず目を開けた。

遠くでござんとうと低い水音が響いていた。

僕は思わず、がばつと身体を揺り起こす。

僕の1メートルほど先には、セアンの姿がゆらゆらと揺らめいていた。（気絶をしているのか、なすすべもなく流されていく）

その先に見えるのは・・・暗渠あんきょの出口だろうか？

時折、しぶきと共にぐわんと空間が歪んでいるようだ。

『なにしてんのよ！タロちゃん！』　僕の背に乗っていたエレインが叫んだ。

『あそこが見える！？　あれは次元の”歪み”よ！　飲み込まれたら二度と出れないわ！』

そんな大変なことをいきなり言われても、と僕はエレインを振り返って聞いてみた。

「どうしたらいいの？」

『あきれた！タロちゃん、あなた暗渠に導かれたでしょ！』 エレ
ーンが容赦なく僕の頭を叩く。

『次元を渡る時、私達の描くイメージが一致しないと危険なのよ！
流れが安定しないの！ お願いタロちゃん・・・猫森村をイメージ
して！！』

そんなの先に教えて欲しいよ、と僕は口を尖らせて反論したかった
が、事態は非常に危険な状況を迎えているようだった。

僕は大きく両手を広げて一掻きした。

ぐんつと速度を上げて僕の身体はセアンに追いついた。
セアンとエレーンを抱えた僕は目を閉じて深呼吸をする。

まぶたの裏に僕は強く念じる - 猫森村へ！ -

周囲から泡がぶくぶくと僕らを包み・・・

・・・エレーンが（眠らせないために）僕の耳をがじがじと齧り・・・

水の流れが大きく変化した・・・

> i 3 5 5 7 2 — 1 7 6 7 <

40・猫森村の長老

暖かい日差しの下で、僕は目を覚ました。

やわらかい風が辺りを吹き抜け、頬を草が撫でている。

チウンチウンとたくさんの鳥たちが近くの木々から騒がしく鳴いていた。

（不思議なことにこの土地には冬の気配が見当たらない）

『ようこそタロさん。ようこそセアンさん。おかえり、エレイン！！』

『待ってたよー！』

その声を聞いた僕は、ゆっくりと身体を起こして辺りを見回す。

そこには懐かしの猫達が顔を覗かせていた。

『久しぶりじゃねえ、タロちゃん』

猫達の背後から老人が現れ、ふおっふおっふお、と笑った。

「ごぶさたしてます、長老」僕は長老にお辞儀をした。

（挨拶を受けた長老は嬉しそうに笑った）

彼が”長老”だ。

”猫森村”の代表なのだ。

（詳しくは前作【タロと今夜も眠らない番組】80話（取材旅行25）あたりを参照ください）

「ごほっ・・・ここはどこ？」 けほけほと咳き込んで目を覚ましたセアンに僕は説明する。

「セアン、君には僕の記憶を見せた。わかるね。ここが”猫森村”だよ」

あの意識のリンクで、僕はセアンと記憶を共有し、互いの情報を刻み付けていたのだ。

「ええ！？あれって映画とか夢の一部じゃなかったの？？」と、戸惑うセアン。（僕とエレーンは肩を竦めた）

「こ、こんにちは、チヨローさん」

片言で挨拶したセアンをにこにこ見つめて長老は頷く。

久しぶりじゃのう、と言いながら長老がゆっくりとした動作でセアンに近づき、少し顔を傾けては何事かを思案した。

（エレーンがそれを見て肩を震わせる）

「・・・だ、誰じゃったかのう？」

僕は改めて紹介した。彼が僕らの仲間として旅に着いて来た事を。

（ボケてるのよ長老って。とエレーンは他の猫達にささやいていた）

「そ、そうじゃったそうじゃった！いやなに、わかつとるわい！」

あわてた長老の額に大粒の汗が光っていた。

長老の人柄に触れ、セアンも緊張を解いたようだ。（人柄といっても本来は猫なのだが）

『いらつちやい！』

長老の背後からかわいい声が聞こえた。

「かちゅ？」僕はなつかしい子猫の名前を呼んだ。

『“かちゅ”はあたいのカアチンよ』 かちゅそっくりのその子猫は、どうやら二代目のようである。

『かあちん、この人たちちってゆ？』

『しってるわよ』 そう言って子猫の後ろから現れた猫は確かにかちゅだった。

かちゅは僕を見つけるとひょいっと身軽に飛びついた。

久しぶりだね、と僕が両手で受け止めると、かちゅはゴロゴロと喉を鳴らして喜んでいた。

子猫がそれを見てすっかり安心したようだ。

『あたいも！あたいもだっこして！』（僕はにっこりと笑って子猫もだっこした）

腕の中で寄り添う二匹は実に親子らしくて可愛い。

『次はわたしの番だからね』 エレーンがむっとした顔でそうつぶやく。

（かちゅ親子はビクッと震えた）

やきもちを焼いているのだ。

エレーンの後ろに村の猫たちがこっそりと並び始めたのと言っまでも無い。（だっこ待ちである）

> i 1 6 6 6 9 — 1 7 6 7 <

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8355s/>

続・タロと今夜も眠らない番組

2011年11月27日19時56分発行